祇園物語

泉鏡花作

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はしがき

御存じの彌次郎兵衞、神風の伊勢に詣でゝ、古市の妓樓千束屋に上方の檀那と酒落れ、座着の猪口の遣取りには、器用な京談を遣ひしが、中立賣千本通り酒も階子でヒヨイと上る邊粟屋の與太九郎と、一座のおやまの買論するや、忽ち管を巻舌にて、おへんが變じて違えねえの眞中のおぢいと成る。此の篇の京言葉、覺束なくも路一條は辿ると雖も、綾が八衢に及ぶ時は、四條小橋でトボンとして、祇園は何處だと云ふやうな、おのぼり式が澤山あり。これしかしながらお辨女郎のためにはあらず、なか／＼酒に醉へるにあらず、作者まことに眞面目にこそ。

→

****

それ如月の夕越なれば、花輪櫻も雲に墨繪、まだ紅梅の莟も點れず。茶店の床几の緋の毛氈に、瀬戸ものゝ火鉢が寂しく、ぽつ／＼燒穴が可哀に目に付く。

京の名所の寺〻の鐘の、どれも響かぬ、フトした靜止間で。ひつそり往來の途絶えた時、東大谷の松林を、山門に向つて　ーー　綺麗に掃清めた埃の無いのが、むざとは人の通はぬ、奥山家の一筋道で、計知られぬ何かの境へ導き入るゝかと、もの懷かしく、心細く且つ陰氣に見えて無明の橋の思がする　ーー

敷石の上を、唯一人、うしろ向きに行く法師があつた。

旅僧であらう……線香の煙が、ソヨとの風もないために、ひたと袖袂の、襞磧に絡まつたやうな鼠の法衣に、袈裟は懸けず、長途の旅を思はする、露に塵に、朽葉色にも成んぬ、脚絆、甲掛。

素足に草鞋で、檜笠を、被らず片手に提げた。頭巾もなく、月も射さば痛からう、ゴソと二分ばかり

の、髪の黒さは未だ少い。白木綿の風呂敷包み、眞中を紺の紐で結へたのを左手にした。……其の笠も、西行背負も、墓所に向ふ謹みに、早や解き脱したものらしい。

途中の塵埃も拂つたか、旅の法衣に砂も留めず、すき／＼と清げにも見ゆるのが、露にしつとりと濡れたか、と殊勝にもあはれである。

茶店の端に婆も居らず、遠近に豆腐屋の聲も無い。花輪櫻が唯一樹、今其處を通り過ぎた旅僧の袖を、衝と及腰に引止むるが如く枝垂れて居た。

渠の姿は少しづゝ、町より、家より、四條より、此の圓山の一處より、其より、獨り一本の櫻の枝に遠ざかる。

後に霞なく、前に霧なく、眞中に靄もなく、透通つたやうな其の松林の敷石を渡るのが、朧に成るより一層幽に、浮世に離れた趣である。

茶店の前の人なき處へ、忽ち、ばら／＼と、花籠を開いたやうな、金銀の簪、錦の帶、八尺扱帶、一分の珠玉、振袖、蹴出し、褄はづれ、友染、鹿の子、緋縮緬。菖蒲、紫、紅、白粉。紋の蝶も飜然と輕く、歩行く姿は舞の振で、扇を重ねた六七枚、祇園の舞妓、藝妓ども。

御守殿の手兒舞見るやう、極彩色にぞめいて練來る。

眞中に、煤拂の武者の如く、外套の袖を擴げて、頭輝くハイカラの御大將。四人連れた舞妓の一人に、醉つた額の鬱陶しさ、黒の中山高を脱いで持たせ、一人に銀飾りの杖を、お太刀の如く極めさせて、くな／＼となり、ふら／＼しながら、

「狸々！　狸々！」

と大な聲して、

「足許はふら／＼と、入江に枯立つ……足許はふら／＼と、入江に枯立つ、……猿澤の池に流灌頂は何うやい、あはゝゝ。」

と笑ふ。が、笑ふのが睨む如く、下脣がべろりと

突出て、見据ゑる眼が眠むつて細い。が、京の人には珍らしく、眦がぐいと釣れた男。

頬骨の角張つた、額の廣い、髪の黒い、脣の赤い、鼻は餘り隆くないが、眉の濃い、……脊は小造りだけれども、肩幅の廣い、小肥りに肥つた、三十ばかりの立派な野蕩。

醉つた脣の色の濃いだけ、頬骨から小鼻へ掛けて、薄りと蒼味を帶びて、血走つたやうに瞼が颯と、額を仰向けに吐く呼吸が迫つて、ものを云ふ、眉の、じり／＼と顰むで暗いのは、酒亂と見えた。

二

其の蒼白い顔に、火のやうな熱い笑を顯はして、
「これ、何うぢやい、猿澤の池の流れ灌頂は？」
「可厭らし、」と、附着いて居た藝妓が一寸退る。
「何ぢや、野晒しの癖にして、可厭らしもないもんや、肩貸せ、これ、退くないやい。」
と、ぶん廻しの様に威勢よく、霜降めりやすの襯衣を長く、腕を高く揮廻す、と間近に居た可愛い舞妓が、兩方の鬢をはつと壓へて横を向く。簪のビラ／／が夕風にぴらりと輝く。
「わはゝゝは。」
と笑つて、苦い顔して、脣を噛みながら、
「……足許はよろ／／と、入江に枯立つ、足許はよろ／／と……」
「分つとる。……」
「よろ／／とばかり言はずと、何ぞ違うたのンお唄ひやすな。」と、中でも年紀上らしいのが振向いて聲を懸けた。

「ふん／＼、何やかて謡うて聞かせる。……な、シテと小がきにある奴や。可えか。……これは洛中一杯に幅をいたす、六條の縮緬問屋、大竹和八八とは我が事なり。今日は志す事も何もなく、清水に詣で、高臺寺に遊び候。之より祇園に立歸らうづる處にて候。」

「そないな事、分つとる、可えやないか。」

「見とうもない大な聲おしやすな。」

「地聲やが、大な聲は。……京ではこれ、御慮外ながら釣鐘と云ふ男や。ー可えか、戀も無情も、私に撞木の當りやう一ツやて！　ゴーン、ウゝウゝン、モン／＼／＼／＼、ワン、グワン／＼／＼。」

「おゝ。」

と云つて、三人ばかり一齊に耳を壓へた。

「何ないしやはる。」

「助からんえ。」

「死にさらせ。」

と怒鳴つて、又目を眠つて吻と呼吸。

「序に十八番の長唄や。……旅の衣はすゞかけ

の、旅の法衣はすゞかけの、露けき袖や絞るらん。
これ、一緒に唄へ。えゝ、口三味線やらんかい。」
唄は違つても足許は如件、よろ／／で、圓山の同一所を、四邊八面にひよろついたが、フト思出した様に、どた／／と駈出して、すらりと優しい影のやうに立つた、花輪櫻の根に近く、大手を一つ、ぬッと開いた。
腰が、据らず、のめつて俯伏にならうとする。
「危いえ。」
「わやゝな。」
で、はら／／と寄つて藝妓、舞妓は、背後から取巻いた。……中には美しい眉を顰めたものもある。
ぐんなり背を搖り、反つて視め、
「これに、別嬪の候。櫻、これ、私が方へ靡けやい、肯きさらさぬと、汝。」
と目を据ゑ、唐突に對手も構はず、……
「あれ。」
と言ふ藝妓の、腕をぐい、と取る、と身を揉む姿

の膝もわなゝく、挫折るやうに引張りつゝ、
「な、言ふ事を肯きさらさぬと、薪にして大文字の下積や。寺の門から墓所抜けに打上げるんや、どないする。」
と切なさうに苦笑ひをしながら、枝ぶりを睨廻した目が、暮れかゝる東山の墨染を衝と仰ぐと、遠い國を、海を隔てゝ望むが如く、敷石の白濱や、漣の松の蔭。……靜かに水脚を引いて行く、流木のやうな、旅僧の、その寂しい後姿を認めたのである。

熟と視て、大な口をゆがめたが、嘲つてニヤリとした。
「年寄ではないやろ、あの坊主の背後つき、何うや？　見て見い。」
と酒の香を横顔に吐懸けたが、忘れたやうに手を放す。
今引抱かれた、其の若いのが、腹を立つた様子もなかつた。京の女は、聲も優しい。
「あ、ほんに少うおすなあ。」

三

和八は目を据ゑて、頷いて、

「年紀の少いに阿房な奴や。坊主に成つて、後生願うて、地獄の門へ去にさらす。……何うや、祇園町でもすぐり抜いた天人に取巻かれて、凡夫が爰に、可え機嫌でましますぢや。

しよぼ／＼草鞋穿きで行く、あの状見い。しゆみさが堪らんわい。……何も功徳や、餓鬼に酒一ツ振舞うて、綺麗な佛拝まさう。一番、白粉まぶしの紅でうでて、鮹の揚物と仕る。わはゝ、面白い。」

又脣を噛んで、

「舞妓、これ、ちやつと行て、何なと云うて、あの坊主、連て來い。」

「あた怪體な、およしやすえ。」と、銀杏返の年上なのが、舞妓に目配せして言つた。

「私、可厭や。」

と其の舞妓が云ふ。

「吐かすな／＼、行けい云うたら行かぬかい。時

が來れば釣鐘が鳴りますわ。はて、朝の別がつらい云うて、鐘撞かせずには濟まんやないか。和八が御意は、我手で撞木を當てる奴や、鳴出いたら聞かさにや置かぬが。

さあ、行かぬかい。行かずば大將御出馬ぢや。」

「待ちいな、貴郎が行かはつたら喧嘩やがな。……どないしまほ……まあ、千鳥はん、汀はん、あない言やはる、あんた二人で行て見なはれ。」

と氣の無さゝうに、銀杏返が指揮をする。

「あい。」「あい。」

からころ木履のじやれた音。綱を切つて車を推した、花籠二ツ、くる／＼とめぐる風情に、揃つて敷石を駈出した。

彼方でひらりと、法衣の袖に、二人の姿の縺れたは、おはぐろ蜻蛉に衝と投掛けた、かゞり絲の兩端の紅の珠かと見ゆる。

「何うや、坊主は來るやろな。」

「來やはりはしまへんえ。」

「なあ。」

と見交はし、言交はす。

「馬鹿吐かせ、極樂の接待や。京の藝妓拝まいて、

酒振舞ふと云ふ菩薩に、掻踞はぬ奴があるか。」
「あれ、見なはれ。汀はんが坊さんの袖につかまりやしたえ。」
「あの妓が行たで、連れまして來やはるか分らん。何云うたかて、誰も叶はん妓やはけな。」
「面白い、坊主が一つくるりと廻つた。はあ、蛸壷の浮いた處や、　ーー　汀に千鳥も見えて候。」
ぐたりと成つて、身體を振つたが、瞳を返して、向うの角の茶店を見た。

が、切なさうに眉根を顰めて、
「えゝ、……お岸、何しとる。此處へ來い。それ、今坊主を呼んで來るんや。きこう、大好物なもんやろが。」
と、何故か、脣を曲げつゝ呼んだ。

其處に、漆のやうな房りした黒髪を、引結めの櫛卷、黄楊の櫛にわがね餘つて、はらりとする。襟脚の白い、耳許の清らかな、瓜核顔の、鼻筋のすつと通つた、一かは目瞼は寂しいが、黒目勝のぱつちりと、水晶に露の滴る、うるみのある、品の可い、

優しいのが、美しい眉を展いて、やゝ其の顔を仰向けに、撫肩の細りした、片手、なよ／＼と疲れた状に下へ支いた、白魚の指の映る、毛氈の色が榮えて、ちらりと簪の燃立つばかり。

質素な服装が水際立つ。……羽織は着ないで、紺地へ茶と藍と、忘れたやうに紅の交つた亂立のお召縮緬。黄金はなしに、錦と見ゆる、印度更紗の帶を、少し胸前を下げ、衣紋は寛いが、胸の薄い、お太鼓のばちん留。浅黄の麻の葉鹿の子、背負上げの結んだ端、媚かしいは其ばかりで、下着の色も見えないまで、褄を深く、床几に淺く、すらりと靡いて腰を掛けた。

年紀は丁ど……一ツ内外。

四

端近に休らう、敷居を隔てゝ、角の其の茶店の軒下に、でこ／＼と圓髷に結つた、横肥りのしたのが、仰々しくも黒繻子の丸帶。襦袢が水紅色と云ふ難のある他、申分の無い、誂へたやうな乳母どのが、取つて二ツぐらゐ、人形かと思ふ、色の白い、いたいけな嬰兒を胸はだけに大事と抱いて、密と差出す。

……

莞爾々々とする其の嬰兒に、……片手で銀紙の風車を見せて、風が無いから、其の打仰いだ細面に、片笑靨を見せながら、見得もなく、フツ／＼、と口許も紅梅の薫を吹いて、くる／＼と廻して見せ、餘念もなげに恍惚した、臈たけた婦がある。

之は今しがた一行が、さんざめいて來て、どや／＼と櫻の下へ崩掛つた頃、後れて、乳母をお先立に、後に添つて、フト紅染めた蔓の細路を辿る體に、寂くすつきりと美しく、此の圓山の片端へ、山の方から辿つて出たが、連には構はず、心易げに、あり合

せた其の床几に掛けた。

渠は祇園の名妓である。

お岸、と其の名を呼ばはつた、和八が號する釣鐘も、後朝ほどには身に沁みぬか、聞きつけた樣子もなく、澄まして風車を吹きながら、……掴まうと出す嬰兒の手から、じらすやうに、一寸引く。

「私にかい。」

彼方では旅僧。汀と、千鳥を左右。草鞋に不意に漣が來てかゝつたやうに、俯向いて右瞻左瞻。

「馳走をして遣る、一緒に來いと……あゝ、向うに見える、あの黒い外套を着て、毛皮の襟卷をした御仁が。飛だ串戲を。」

と事もなげに笑み、

「失禮をする、急ぎます。」

「嘘やおへん、なあ、汀はん。」

「一遍歸つておくれやす、お迎ひに來たのどすはけ、どないなとして。」

汀の方が大人びて、友染の腰を屈める。小兒ながら其の慇懃さに、と、出家もつい會釋を返して、

「いや、串戯でなくば、よくお禮を云うて下さい。御志、難有う存じますが、最うやがてこれ、」

と向直つて山門の暗さを仰ぎ、

「日も暮れます。些と當山に知己のものがあつて訪ねます。夜分に成りますと、不都合と存じます。直ぐに參りたい、失禮をする。思召は受納いたしました……分つたかな。……厚くお禮を申す。」

と言棄てると、檜笠と風呂敷包を、其の兩手に、法衣の袖を颯と拂つた。

「御坊はん。」

汀がさそくに、追縋つて袖を控へ、

「御先祖の日やよつて、回向して欲し、と云うてどすえ。」……と眞顔で云ふ。

旅僧は莞爾とした。

「おゝ、利口な孃だ。」と思はず其の頭を撫でさうにしたが、簪に心付いて、笠の紐を捌いて引いて、

「御覽の通り法衣は被ても、まだ一向な青道心。出來るのは、關伽を汲んだり、墓の掃除をするばかり。お念佛の節もよく心得ません。御先祖代〳〵の御回向は、なまなかな出家より、貴方が御自分になさる

方が、却つて御追福に成ります、と然う申して下さい。よい孃だな、さあ、お放し！」

「千鳥はん、つかまへや……放すとならんえ。」

「直接に言うておくれやす、私たちが叱られるはけな。」

と千鳥も振下つて、ぐい、と縋る。

「一寸行くには仔細ないが、大分醉つて居らるゝ様子、で、斷るに煩しい。」と言ひながら、何と思つたか、風呂敷包を腕まくりに、づい、と、手繰つて、檜笠を前下りに二人を見ながら、引緊つた口許で丁と結ぶ。之が支度で、來るよ、と思つて、ほゝ、と笑つた、舞妓二人は鶯の聲。

あゝ何處かで鳴く、……ホー法華經。宗旨違ひの大谷へ、翠の霞がほんのり渡る。

五

わざ／＼然うして、笠を着たのは、實は、手を明けるためであつた。

白の手甲掛けた左右で、突然、兩方の袖に掴まつた二人の舞妓の腮の下を、くす／＼と遣つて、擽つて、

「こちよ／＼、」と口で囃す、……と汀も千鳥も、きやつと言つて、一窘み。だらり結びの赤地の錦も、京髷も、友染の振袖も、五色の絲で花輪を重ねた手鞠を縷つたやうに成る。

擽り留めて、旅僧は身を開いた。

が、其のまゝに縺れ合つて、恰も魅せられたもの、如く、傳へ聞く法師が算術で呪はれた小女房のやうに、絶え入るばかり、身悶えして笑止まず、敷石の上にひつたり固る。

振返つて呵々と笑つた。旅僧は脊伸をした。が、

後をも見ないで、山門へ、すた／／行く。

駒下駄の音が沈んで、小刻みに、すら／／と舞妓どもの傍を衝と通つて、

「一寸……」と云つて、背後から優しい聲を、凜と呼掛けたのはお岸である。

「一寸……待つておくれやす、御坊はん。」と、走り寄つた呼吸づかひで、おくれ毛がはら／／戰ぐ。空惚けて、

「はあ、私の事か。」

「貴下はん。」

「私に、何か？」

「お願ひがあるのンえ。」

「而して誰方で？」

「私な……」

と薄い松葉色の、絹の襟卷を解いて取つて、

「祇園町の、岸といふ藝妓どす。」と衝と弱腰を輕く、二枚襲の裳で受けて、膝をすらりと敷石に姿を細く、撫肩の手を支いた、頸の雪の下透く紅梅。脇明けひらめく紅が、敷石の表に映つて、山門へ續

いた花の下道、此の黄昏も朧に媚めく。

出家も聊か驚いた顔をして、

「舞妓はんが來て縋らはつても、お越し下はりまへんよつて、私に行て、連れまうて來い云うてな、お客はんが言やはります。

今、貴方はんの右の袖つかまへて居やはつた孃な、汀はん言うて、大抵の事は、あの孃が出やはつたら出來るのえ、……其でもあかんよつて、他の人たちは、叶はん言うて、誰も使によう來んのどす。

明かんな！　祇園町に、あの御出家一人、連れて來得えるものないか。岸、行て來い、……と無理言やはる。

口惜いやないか、私が行て來る、言うて、うけ合うてお迎ひに來たのどす。

貴下はん、御迷惑なやろけれど、私な、後生やよつて、一遍戻つて、遊んで行ておくれやす。……

何の、私が導いて去ぬのやおへん。貴下はんがな、助ける思うて、……彼方へと連れ戻っておくれやす。嘘やおへん、肯いておくれんのやったら、髪切ってな、尼に成るよって、お弟子にしておくれやすや。」と静かにしめやかに言ふのであった。が、意氣込は尋常ならず、纖弱い肩に呼吸が響く。

檜笠をかなぐり脱いで、ト取直すと、跪いたお岸の膝を掬ふが如く、裏を飜して一揖して、

「之は過分な。先づ、お手をお上げ下さい、お膝を。」と言ふ。

「然したら、肯いておくれやすか。」

「さあ？」

「然やなかったら、私、此處の土に成るのどす。」

「いや、直ぐにお供をします。」

「眞個にかえ、御坊はん。」

「さて恁う成ると、如何にも恩を被せがましく、勿體振ったが、お恥かしい。」

舞妓二人がはら／＼と寄った。

汀が小癪に、莞爾々々して、

「御坊(ごぼう)はん、こちよ／／／／。」
「はて。」と片手(かたて)に額(ひたひ)を撫(な)でゝ、法衣(ころも)の袖(そで)を合(あ)はせたのである。

六

「やあ、御坊、こりや、お出で。」
和八が筒抜けな大きな聲。
一人の藝妓が氣の毒さうに、
「吃驚するが、何や、貴下。」
「豫て地聲や、と斷つたるが、喧しい。」と反對に叱りつけて、
「御坊、はじめて逢ひますわ。」
「はい／＼、お初に。」……と腰も口も輕い挨拶。旅僧は何も逆らはぬ氣で居るらしい。

「ですが、御坊、のいた中ぢやごわへんぜ。手前は大竹和八と言ひます、町の中の釣鐘でんす。」
「結構でございます。」
「まだ何も寄進に附かうとは言はんでな、結構は早過ぎますわ。」
「はい。」
其の柔順さに、張合抜けして、ゲツ、と一ツ噫曖を吐つた。

「いや、口はどには毒の無い男でんす。はゝは、何が、一面識も無い御坊を、無理強ひにお止め申して、大矢禮。」

とぐつたり、と叩頭をして、

「何も此の櫻に免じて御許され。……鷲の尾に請状はなし花の友……となな。……最もまだ咲きはせぬが、ーー　それ、もの言ふ花がづらり居ります、聞えましたか、御坊。」

「はい／＼、私は一向不調法でありますが、眞個に御風流でございます。」

「風流も可いけれど、あゝ、ぞく／＼して來た。」と身ぶるひする。

「醉覺どすせ。」

「其の見當や、……そろ／＼引揚げと仕るか。」

と些と醉も醒めた様子で、

「えつと、御坊。之から暇へお伴をして、戀と無常の鐘の撞分け、ぐわんと一つ遣るでんす。是非ともにお附合。……」

「如何とも。萬事は、……此の御婦人にお任せ

をしました。」

とて、松の姿に引添うた、藤のお岸を一寸見る。

「一遍附合うておくれやす、濟まん事。」

「はい／＼。」

「お手柄々々、何事も君に限る。」と、和八はお岸に細い目遣ひ、

「さて極つたわ。いづれ今夜は飲明さうで、身どもなどは構はん事やが、御坊は旅の御様子や。時間も北山とおはしまさう、が、酒の最中にお齋はむさい。前へ齋を一ツ進ずるぢやな。

何もお岸、彼もお岸や。きこう、御坊を連れてな、千茂登は酒も可い、西石垣へ走んなはれ。此方人づれは畷で待つで、可えか、可えか。」

お岸が黙つて頷いた。

「俥！　俥！！」

と和八が喚く、と此の釣鐘の撞木は當つた。靄の奥は最う暗く、ちら／＼と灯が見えて、人の影は無かつたに、廣場の隅の方から、ひよつこりと出たの

は車夫。

ちやら／／と曳いて來るは、京都に多い相乘車で。

「へえ、旦那、」と若衆は東京を極める。

「相ばこか。」

と出家を察して、二三人、一度に言ふ。

和八が、じろりと視めながら、

「構はん。」と切つて放す。

「貴下は、構はんかてなあ。」

「大事おへん。」と屹と言つて、密と流した目遣ひは、對手がたとひ鬼神なりとも、歌の心は讀むのであつた。

「御免。」

と云つて、旅僧は、其のまゝ不器用らしく、もつさり乘る。

車夫が見て、

「お笠は此方へ。」

お岸がすらりと寄つた時、

「あゝ、」と、雛鳥が可愛らしい、乳母の手に抱かれながら、前刻持たしたと見える、握手にした風車を、これ、上げましよの仕方ぞや。

「大きに、」と莞爾すると、頬を合はせて、嬰兒に衝と接吻。

俥はやがて、風車ほのかに白く、くる／／と、四條の橋へ舞ひながら。

七

二人を乗せた相乗が、黄昏の小路を廻り行く状は、足繁き往來の目に、其の風車が蝴蝶のやう、美しい春の夢が、中空に霞を漾ふ、と・・・髣髴として見えたのである。

豫て駄々良の名に立つた和八の我儘は珍らしく無い。見も知らぬ旅僧を引戻したのも、花の堤で打つかつて、杯をさしたと思へは、別に怪むまでもなし、又何事も無かつたらう。

が、和八の何時も入浸る・・・・今夜も其處へ引揚げると云ふ、祇園の廓に柳櫻、一力と右左の、暇の揚屋、大可と云ふのへ、直ぐに一緒に連れないで、お岸に西石垣の料理茶屋へ、恁うして案内させて遣つたのが、事の起るもとであつた。

しかし其は、其の西石垣の千茂登から　ー　二人が歸る時である。

ゆきには、四條の西詰で車を返した。手を取らぬばかり、久しぶりの兄にでも逢つたらしく、些とも四邊へは氣を措かないで、

「其の風呂敷包お出しやす、私が持つはけ。」

「飛だ事を……荷にも何にもなりません。放すとまた手の遣り場に困りますから。」

「そしたら手を曳いておくれやす、ほゝほゝ、由良さんの居やはる方へ。」

「私などがお連れ申すと、却つて縁の下へ參ります。」

「何やかて構やへん……手の鳴る方へ行にますえ。」

と莞爾して、

「……此方どす。」と言ふ。

千茂登の門は閉つて居た。……點いたばかりの電燈が新しく、裏を行抜けに鴨川べりを鳥の飛ぶやう、ばら／＼忙しさうに女中の行交ふのが見透かされたが、暮合の戸は嚴重らしく鎖されたのである。

立向つて、思懸けない、と云つた風で、お岸は黙つて彳むだが、便なささうに、軒の柳が一本暮れかゝつた風情であつた。

「どないしたンや。」

と扇の小間を、三ツばかり開いたやうな、橋詰の石垣を横に擴げた土手なりの一町。狭い家居の、丁ど向前が一寸した小さな床屋で。

店にまだ燈も點けず、硝子戸の上へ張出しの暖簾を掛けた、紺地の薄暗いのに、べつとりと濃繪の具で、辨髪の支那人がまくり手で立掛つて、ト笄で撓めると、島田をがツくりと仰向けに、恍惚した顔の白さ、紅の蹴出し露出に、婦の椅子に掛つた處を描いて、白抜きに、（あんじよう取ります、健沈。）と記してある。耳の垢を取ると見える。油でいためた汁のものに、けんちんの名があると云つて、之は酒落ではない、垢取長官の諱であらう。

此の折から、椅子の婦の、件の緋褌を不作法に横ちよへ絞つて、硝子戸から繪の如き唐模様で、頭も

顔も、のツぺらぼうに、ヌイと半身を突出したのは、垢取の健沈なり。

目の前に竝んで立つた、お岸と旅僧の道行振をじろりと視めて、何か分らず、突拍子な聲を出して、

「ばあ、ばあ。」と口を開く。

お岸は斜に見返つて、

「南京はんが、何か云うて居やはる。」と莞爾笑ふ。

旅僧は、お岸の言に、はじめて氣が付いたやうだつたが、

「前刻は。」

と言つて、其の支那人に會釋した。

垢取健沈、頭と手を搔くやうに、ぐら／／と振つて、ニヤ／／しながら、

「ばあ／／ぱあ。」

八

お岸は兩方を見較べて、

「貴下、南京はん知つてやはるか。」

「然やう、前刻ほど此處を通り懸りました節、大谷へ參る路を、此の店で聞きましたよ。で、橋詰へ來ながら、四條さへ分らない一向な田舎もので、貴女にも飛だ御迷惑。」

と云ふ。處へ床屋の主人が、健沈に肩を竝べて、黒鼈甲の太い縁の、大な目金を掛けた鼻の下の長い顏を出して差覗いた。

小鼻へ皺を寄せて、づるツこけさうな目金越に、稀有な顏をして、

「千茂登はお客はんで充滿どすが。」と獨言の如く言つて聞かせて、めくら縞の前垂をだらりとしめて、其でも白の筒袖だけは羽織つて居る、昔の辻番が葬式に雇まれたと云ふ形。高足駄をガタ／＼鳴らして軒下へ出ると、暖簾の前に椅子を一ツ、其の上へ安置して日に當てゝ置いたらしい、サボテンの鉢植を恭しく取上げて、兜の鑑定と云ふ構へ、蒼入道の棘にかゝつた、砂埃をフツと吹いて、頤を出して、

撓めた處は、爭はれぬ床屋の御隱居。

何と見事なか、と云ふ素振で、見せ付けながら、支那人の鼻の頭へ、チト前屈みに内へ引込む。

「ばあ／＼。」

と唯言つて、垢取健沈まだ染々と視て立てり。

「あゝ、座敷が無いよつて、戸を閉めた……そしたら、大事おへん。此方へおいでやす。」

とお岸が頷いて立直つて、すら／＼と行つたのは、間に板塀を隔てた横手の勝手口。其處も閉つて居たのを、づツと開けると、事も壯な料理場で、七輪の火が、くわつとお岸の顔を染めた。

些と後れて、又會釋して、健沈の顔が暖簾の裏へ潜つた時、續いて旅僧も其處へ來る。

洗方の若いものが、其の途端に大きな聲で、

「畜生め。」

平時も狙つて嗅ぎに來る野良犬だと早合點で、向う見ずに喚いた處。ト顔を出されて、

「ひよう！」と言ふ。
「違やしまへん、はゝゝゝ。」
「はゝはゝゝ。」と板に居合す四五人が、聲を揃へて一齊に哄と笑つた。
「違ひまへん、畜生は畜生やけど、麒麟云ふ偉い奴や。」と洗方は額を撫でる。
「座敷はどないどす。」
「ぎつちりでなあ。」
「あ、おいでやす。」と、階子段の下の、廣い廊下を通りがかりの女中が見附けて、棚のまはりを、ばた／＼と急いで來た。
「ちやとお上りやす、どないなとするによつて。」
「さあ、貴下はん。」
「お連はん……」とお岸の背後の、宵闇に、法衣の姿を、初めて見た。
「下駄を一足拝借が願ひたい。川で洗つて參ります。」

「ほんに、貴下はん、草鞋どしたな。お三いはん。」とお岸は女中を呼んで、
「小盥にな、一遍お湯取っておくれやすや。」
「はあ、可うおす。」と言つたものゝ、……四條の橋詰に柳があつて、禁札が建つた頃は知らず。既にして西石垣のお花が、本町筋の刀屋へ詰袖で推掛けた時代から、こゝらで洗足をする旅人は無い。と、女中はひよんな顔で當惑して、
「生簀で洗やはつたら何うどすやろ。」と、うつかりボンとして眞面目である。
「わや言ひはなれ。鯉やかて鮒やかて、之から食べはるのや、泥を突込んでどないする。」と板前が大に理を推す。
「かてゝ、とらまへる時は漁師が跣足やないか。」
「近頃は自動車で網を打つ！　阿房らしい、早う汲んで上げなはれ、湯はどんどとある。」と、俎に柄を返して、疱丁を丁と入れた。

九

兎角して先づ此へ。……二人を通したのは階子段の傍に成る、六疊の茶の室で、内證の住居。

狭い處にぎつしりと、箪笥が揃つて、床には古流な、軸物あり。長火鉢に鐵瓶が音を立てゝ、猫板の湯呑も見えた。棚の上には煉物の大きな福助、ニヤリとして、

「や、おいで。」と扇子を構へて出額で控へる。

長火鉢のさしむかひで、お岸が入口の障子を背に、旅僧を、鴨川に縁側つけた小庭の方へ。二枚襲つた友染の大きな座蒲團の、下のを引出して坐らせながら、自分は腰を浮かせつゝ、中腰で、白い指で、拭込んだ火鉢の縁を彈き彈き、鐵瓶の湯氣で、風車のくる／＼と廻るのを、涼しい瞳で熟と見て居たが、

「預けますわ。」と云つて、其のまゝ箪笥の鐶へ、すつと挿すと、はずみで又一つくるりと廻る、上から福助拝見也。

之を視て、
「乳母に抱かれて居なすつたは、和女のお妹御でおいでなさるか。」
「嬰兒はんどすか。妹やおへん、貴下もな、お世辭言やはつて。」
「世辭では無いが、何か、姉さんに、などと、乳母が然やう申したやうに聞きました。」

「可厭や、私が、こんな勤めしとるやけ、母はん云うたら、色氣がないやろてゝな、姉はん云ふのやて、皆んなが教へはるのどすせ。いとしおすせ。嬰兒はんやかて、母はんがなうて、どないしまほ、父はんもないンやもん。」
「はゝあ、御親父は？　すると、貴下のお連合は何うなすつた。」
「どないやら、分りしめん。」
と顔を背けて、
「向ひの内で、耳の垢なと取つとりやはるかいな。」と寂しく笑つた。
「お待遠やしな。」

と女中が來た。
「茶々〳〵一ツまだ上げんでなあ。」と、別に火を取るつもりで、片隅にあつた、桐の丸火鉢を、トつき膝で、灰をならす。
「私が入れよか。三いはん、此處の入れて段ないやろ。」
と茶盆を引く。

「座敷やがな、貴女。お會計もちやと濟ましやはつたよつて、最う明くのや思ふと、又冴返つて話しとりやはるんどすせ。何う成りへんえ。」
「繁昌で可うおす。」
「何時もこないな事ばかりありへんけどな。もう一遍、なぞ掛けて見ますかいな。」
「火も最う結構。」
と旅僧は居直つて、
「御混雑の處を、其に和女もお忙しい。又の事にしては如何で、私もまだ、然まで食事も急ぎませんから。」
「而したらな、此處でしたら何うどす、貴下はん、

お厭どすか。」
と、お岸があらためて〓はして言ふ。
「私は辻堂で差支へません、結構過ぎます。」
「然やつたらな、三いはん、此處にしまつせな、おかみさんに、御迷惑や云うておくれやす。」
板前の廊下の境に、褄を挾んで立膝で、斑布の櫛で、艶々した圓髷の鬢を掻きながら、前垂の端へ飛つかせ、飛びつかせ、眞黒な狆をじやらかして居た、此家の内儀が、ひよいと、奴を引抱へると、絹布の裾をするりと來て、
「お岸はん、豪い濟まん事やなあ。」
「私こそや。」
「之はお客はん、粗末なや。」
「はい／＼、お雑作に。」と丁寧に會釋する。
内儀は二人の其の姿を、長火鉢の縦に見て、
「お岸はん、似合うたえ。」
「然やつたら、寧そ、蝶足にしておくれやす。なあ、三いはん、お取膳にするよつて。」
「どうも成らんな。」
「お燗も此處で。」と鐵瓶を傍へ下せば、

内儀(ないぎ)が起(た)って、
「世帯(しょたい)は、渡(わた)いた。」

十

「いや、お酌では恐入る。手なんぞ細い事、痩せておいでなさいますな、身體がお弱さうだ。」

と旅僧はしみ／＼言ふ。膝も崩さぬ其の姿、背戸に近い鴨川の水が、床下にさら／＼と筧を走るやうな澄み切つた音を通はせ、幽かに搖れて、墨染の袖に響く。酒の香はゆるく電燈を繞つて、醉へる瑪瑙の如くに照らす。時に、チリ／＼と千鳥が鳴くので、杯の數も一ツ／＼、孤家に數珠を數ふる趣して、お岸が掛けた半襟の梅の莟も、白く清らかに膚寒い。

京は底冷えのする處である。

お岸は、薄い膝に指を反らして、

「藥の絶えた事ないのえ。去年の秋の末頃どす。お産してからな、尚ほ不快うてな、合間やないと、座敷へも出やへんのどす。此の頃もな、又半月ほど寝たのどすせ。どないするやろな、……又痩せた。」

と寂しさうに、頤で襟を壓へたが、一片其の梅の莟を、皓歯で噛むやうに優しく見える。

「野晒のやうにおすやろな。」
「野晒とは？」
「草の根際に、ポキンと骨が散ばつて、目の穴から薄が長う生えるのえ、描いた繪がありますやろ。」
「はゝあ、骸骨。」
とつきもなく笑ひながら、
「卒塔婆小町と云ふ事か・・・・・詰らんことを。眞に透通るやうでおいでだが、大丈夫骨は見えません。」と、をかしな事をまじ／＼と殊勝に云ふ。

「然やつたら、お酌さしておくれやす。私な、そないにな、何時までも活きて居たいことないよつて、肥りたいことはおへんけどな、骸骨やつたら、貴下はん、氣味が惡いやろ思ふのえ。御出家はんの目から見やはつたら、私たちの島田やかて、髑髏に見えますやろ。」
「不思議な事をお言ひなさるね。何うして、名僧智識とでも云ふなら格別、私如きぢや、在家の衆より、十倍も綺麗に見えます。殆ど天人かと思ふくらゐで。」

「言うてどすな、可厭。……こんな處へ、無理に來て貰うたはけ、せう事なうて、然ないに言やはります。大谷へ入つてどしたら、矢張り骸骨に見えるのどしやろ。」

「附かん事を聞きますが、」

旅僧は改まつた體で居直りつゝ、

「あなた、何かそんな事で、氣に成る事でもありますか。」

「始終どすせ、それにな、今日や。」

「今日と云ふと？」

「貴下にな、彼方でお目にかゝらん前にな、……今日は、大谷のお墓所へおまゐりをしたのどす。」

「あゝ、あのお連の方は。　ー　それでは、御一統。」

「違ひます……私一人、嬰兒はんも連れてやおへん。嬰兒はんはな、おとなしう、よう家で遊びやはるけれど、時々な……病氣に成らはつたやうに、私の後、追やはるのえ。然やと、誰が何云うて賺いても肯かはりへんのん、直きに乳母やが連れて來やはる。

揚屋でも何處でも然うへ。今日はな、私一人で行つた。又病氣が出て、わや言やはるよつて、乳母が抱いて、連れて來やはつた處へ、私がお參り濟まいて、歸る路で、……あの、花輪櫻の根際で、。ハツタリ逢うた。

次手や、と粗末なはけ、祇園はんは鳥居で密と拝んで、二軒茶屋の前へ來たら、玩弄屋の店で、岸はん云うて、其處の主人はんが呼びやはる。

而してな、此の間のお錢返します、　ーー　こない言ふ。

際に勘定したお剩錢かいな思うたら、然やない、わやくして、餘計に取つた……今返します言やはつた。何や、私、知らん言うたがな、漸つと分つた。」

十一

「其の前にな、夜さり祇園はんへお參りした其の歸途どした。同じ玩弄屋へ入つて、嬰兒はんにな、何か買うてと思うて、視めて居た。餘所の上はんがな、五歳ばかりの女の兒の手々引いて入らはつて、護謨鞠の彩色したのン幾千や聞いて、お引きやす、之だけ……言うて値切らはる。

正札附だすよつてな、どないにも為よことがない……斷らはるけれど、お引きやす、成りません、言うて果しがないえ。あんまり良い服装もして居やはらん上はんどす。小兒が泣きましやろな。

引いてお上げやすえ、私が云うたら、可うおます、お持ちやすや。　ー　上はんが禮云うて歸らはつたんえ。

際にな、手遊屋が平時のやうに書出しよこした。其をば拂ふたのだすな。……今日呼ばはつたは、其の事どつせ。

私が口利いて、上はんに引いた分をば、私の方へつけたよつて、後で思ふと、餘り慾張らしいはけに、其のお錢を返しまほ云やはるのえ。

然やつたら、別に何ぞ貰ます云うたけれど、澤山ありましやろ。藥湯の横町の私の内はな、やつと嬰兒はんの屋根葺いた手遊箱やよつて、どれも取て歸るのがないのンえ。乳母がな、あ、と思出した。

有り觸れた風車が一ツもないのどす。よつて、之をば。」

と言ふのが箪笥の環に。……ト一ツ、平手でくるりと廻はして、

「取つて出ようとした處へな、二軒茶屋から騒ぎまうて、前刻のお客はんが出て來やはつた。

揚屋へ歸る處やけれど、お岸、あんたの顔見たら、清水はんへ參るよつて、どないしても一緒に來いと、捉まへて離しはらんのンえ。

然やで連れられて行んのだどす。貴下はんに圓

山で逢うたは、其の歸途どすえ。」と、顔を見ながら、優しい聲して話すのが、やゝ口早には聞えるけれども、春の風のありとも見えず、そよいで花を渡るやうで、聞くものゝ坊主頭にも、姫小松の緑を被がす。瞻ると近優りして、一緒に被衣の中へ入つて、霞に包まるゝやうである。然るにても涼しき目ざし、心も言も、一點の曇もなしに、眉のあたりに透通る。

旅僧はうつかりして居た。

「何か、其の途すがら、氣に成る事がありましたか。」

「然うやおへん、其はな、大谷のお墓所で、まだ嬰兒はんにも逢はん前どす。貴下、床店で四條の橋訊いた云うて笑やはつたな。そしたら大谷もはじめてのお參りだしやろ。」

「如何にも、まだ御縁がなくて。其癖、隨分、諸國■■■うて歩行きますのに。　ーー　はゝあ、其處で。」

「あのな、大谷のお墓所云うたら、何や知らん、寂しい、廣い、心細いな、なぞへに高い山に成つて

大きな樹ばかり、じめ／＼して、陰氣でな。盆やら彼岸やらでないとさへ、誰も入らはらんよつて、前刻やかて、梟鳥が威いて居た……　私な、其處で見たんえ。野晒をな。」

急に美しい眉を顰めたと思ふと、手先を引いて、淡雪を厭ふ風情に、衝と片袖を顔に翳す、薄紅梅がはらりと溢れて、愛くるしい緋鹿子の、細い筒袖が二の腕透く。鶯も來て宿れかし。

旅僧はホツと云つて、

「之は熱い。」

と一口飲み、

「お色が好くない。一ツおかさね。阿女なか／＼飲けますな。お見事だ。いや、髑髏も圓いと思へば、手前なぞ、木賃でします木の根の枕より頼母しい。何の、阿女、向うの床屋の垢取りの本國などでは、昔あれに漆を装つて、杯にして冷酒を飲んだものださうでござる。」

と聊か醉つたか、串戯な口ぶりで、

「本山、別院の、緞子金襴のお歴々は別だ。私のやうな行脚坊主と、お相酌を下さるお心持で、卵塔場の骸骨如きを更に氣になさる事はない。

大丈夫、阿女などは百年の後、燒いても琅奸と申す珠に成る。」

と事もなけに言つて、一盞、手丁酢で參る。

十二

お岸は聞いて嬉しさうに見えた。

「琅奸云うて、どないもんでしやろ。」

「あの水晶へ紺青の浪が懸つた色で、龍宮では簪にする珠です。」

「何云やはる、晴がまし……私が何で。」

「いや／＼、私が習つた御經には、ちやんと然う説いてあります。間違ひはありません。」

「然やつたら。」

と火鉢の角へ、蒲團をずらして、

「御坊さんは何のお宗旨どすえ。」と少し意氣込んで、目を〓つて聞く。

旅僧ハタと額に手を當て、

「どれも少々／＼。……私などが、拝むに及ばぬと云ふのはありませんから、何宗でも構ひませんな。」

「あのな、私をば、其のな、貴下のお弟子にしておくれやす。」

「弟子とは？」

「其の珠に成らいでもな、死んだら、恐らしい野

晒に成らん御經を教へておくれやす、私、可厭やわ。」

と拗ねたやうに、肩を振つて、

「大谷の、墓守坊さん……」

「教へるも何も、骨が玉に成る事は、却つて今、阿女から私が教はつたばかりなのです……其のまゝ、其のまゝ。」

と頷いて、お岸の乗出した座を押戻すやうに片手を擧げた。

「其のまゝ、そツとして置けば結構なんです。……其で、何か、墓所の坊さんが、然やうな事を言ひましたか。」

「はあ、言やはりました。……私な、けツたいで成らん。……山門の中でもな。……貴下はんがおいでやした、あの敷石の許から直入るのどつせ。先刻、私が門へ入るとな、松の樹のすら／＼竝んだ下を、寂とした廣前を、七ツ八ツばかしの可愛らしい女の兒が、大な籠をば背に負うて、焚くもの拾うたのンやら、籠の底に、輕うな、枯た松葉と松毬

を少し入れはつて、一人で、いとしげに來やはつたんえ。

南禪寺の境内やつたら、あのな、一ツ空へ飛んで行て、一ツだけ殘つた大きな石燈籠のまはりやなど、二三人も落葉掻く兒が何時も居て、朝夕、鐘を聞く時見るけどな。一寸々々行くのに、大谷の門の中では、はじめて逢うた。

誰も居やへん。私一人どしたんえ。

寂しいのンやろ、母さんや父さんは居やはらんかいな思うて、私かて心細うなつたんどすせ。

お錢少し、細〓などお買ひやすや、云うて手に渡いた。

小さな手々を、顱巻した頭へ上げて頂きやはる。

ほろ／＼と涙が出てな、目々押へて別れたのンえ。

少し行て後を見るとな、お聞きやす。……何處に居た知らん、山門の柱の裏から、荒布を揉んだやうな衣着て、蓬しまに髪を捌いた、まだ年の少いな、色の眞蒼な婦女が出てな、引手奪つて、其のお錢を

ばカチリと石へ叩きつけた。音が聞えたのどすせ。

措きなはれ、畜生の手から、汚れるえ……乞食してかて人間や。……云うて、ずる／＼と其の兒を引いて、門の外へ去て了た。

何や知らん、怪體な思うてな。……腹の立つより悚然として寒かつたンえ。

梟鳥が鳴くやろな。……今のが煙のやうなものやないか、松の樹ばツかしで何にも見えん。

呼吸せいてな、急いで行た。式臺へ廻つて、頼みます云うて、遠い處から、年寄らはつた、坊はんを呼出いてな、お墓所へお經あげに一緒について來て貰うたんえ。

杖を支いて、びしよ／＼と來やはりますやろ。水を汲んで……手桶持ついやはるけれど、お足は危うてあかんのだしやろ、お華は持つて行た。」

「お話の中だけれど、お墓はどちらか、御両親の？」

「父はん、母はんのは他にあります。……今日お参りしたのはな……仲ようして居た……友だちどす。去年、夏なくならはつた。」

と悄れたやうに差俯く。

十三

「美し／／人でな。華がたんと好きやつたよつて、私な、紅梅を持つて行たえ。坊はんが持つて遣る言やはつたが、其の人に手向けるやよつて、私が持ちたうおすやろな。

闍伽桶と、梅の枝、兩手に提げた。お墓は路がありまつせ、青う苔が生えて、辷るやろな。

杖に縋つて、數珠を繰つて、（轉びなや、轉びなや、轉んだら三年坂ぢや。）と口の中で言やはります。……三年坂はな、轉ぶと死ぬと言ふ處だつせ。

私な、お足が堅う成つた。梟鳥の鳴く事いな。

段々／／、樹林が深うなるはけ、其の聲に、暗い處へ呼込まれるか思うたえ。お墓はな、少し小高い許にあるのンどす。何處から落ちて來るやろな、烏が羽で振撒くやら、香立も、華立も、黒い木の葉で一杯どす。

坊はんがな、杖で突いて拂やはるはけ。ー一止め

ておくれやす……

いぶつたら地の下でも切なうおしやろ思ふはけ、線香も持つて來んのどすえ云うてな、そしてな、あの柄杓で水を汲んで居た時どすせ。

何や知らん、ちヤと背後の樹の陰で、可厭な聲でな、うゝ／＼犬が吠えるやないか、氣疎う吠える云うたらないのンえ。

（何や、和尚はん。）

私立つて居て然う云うた。

（しッ／＼、）と口の中で獨言云うてやはる。

犬に聞えるかいな。

尚と吠えましやろ。……恐ろし成つたのンえ、ホー／＼鳥は最う鳴きへん。

（何や、和尚はん。）

（亡者が來たかなう。）

（可厭。）

（然したらお客ぢやが、やくにも立たぬ、狐か狸か來せたであろわい。一遍見て遣ろ。しッ／＼、轉

びなや、轉びなや。）……云うてな、びしよ／＼と草履で行かはる。……

私もな氣味惡る／＼附いて行た。人を見たら尚と吠えるのどすせ、狐の相の子やおへんのかいな、耳のツと尖がつた、鼻の細い、焦茶色の犬だつせ。鋭い目して、脚で蹴つたり、鼻頭で嗅いだり、くる／＼吠え廻うてどす。

（あツ）云うた、私な。」

と肩を反らして、後へ手を支き、

「（野晒や！……）

（しツ／＼。）云やはつて、坊はんが杖の尖で、ぶる／＼震へながら、地面叩かはつたによつて、犬は、ちやと宙を飛んで、退つて、大な杉の樹の眞暗な根際から、天狗はんの面見たいに長い鼻のさき出いて、目をピカ／＼と睨むのどつせ、……凄かつたしな。

野晒はな、密と覗いて見た。何うどすいな、額が

岩のやうに突張つて、目がぱツくり、握拳見た穴を明けて、上頤も歯も一ツも繋がつて居んのどす……半分、顔をば打缺いたやうでな、薄べらにめくれ返つて、頭の處に、ベツトリと爛れ朽ちた、皮が絡つて、めら／＼と、其が恁うな、後へ退いても藍の色して、眞蒼に、ボーと火が燃えたやうに見えるのンえ。其の殘つた皮からな、何うどすやろ、ずら／＼と、眞黒な長い毛が生え伸びて居てな、青苔の上へと畝を打つわ。

山門で見た、蒼い顔した女子の、首だけ飛んで來たのやないか思ふと、よろくと足がすくんだ。

飛んで返つて、

（どないしよ！）……と、其の貴下、友だちの墓へ縋着いた。

（鹽梅が、若い女子や。）……獨言言やはつてな、其の和尚はんが、ぐツ／＼野晒を突き散らかはつた。

杖の尖返いて、歯の無い口をむく／＼と動かいて、クン／＼鼻で嗅がはつたンえ。」

「可厭な事をする、……氣障な奴だな。」
と旅僧は思はず、呟くが如くに言つた。
「はあ、然うどすやろな。」
お岸もうつかりしたやうに言つた、が、冷かに罵つた今の言葉を、嬉しさうに、旅僧の顔を見て、火鉢の縁へ嬲やかに肱を掛ける。

14

☆14

十四

「和尚はんかて、何やら怪體な、化けやはつたやうにおしたえ。……
然やつて、杖の先嗅いで見やはつてな。
（ふん／＼、まだ生々しこツちや。犬めが食缺いたやろが、手足は何ないしたぞ。……何處から咥へて來せたやろ。適々はある事なが、澤山はない、

珍らし事や。　ーー

なあ、和女、）

云うて、可厭や！　其の野晒をな、和尚はんが又杖で突いて、私が方へ轉がいた。ぶは／＼とな、動く上を、蒼白い煙が地面這ふのどつせ。蛞蝓がべた／＼と附着いて居たえ。

（供養して上げなはれや、何ぞ縁あつて、和女の傍へ來たのやろ。）

私、手で拂ろた、袂被つてな。」

と俯目に、叉密と其の袖を擧げたが、仇氣なく愛らしく、且つあはれに見えた。

「和尚はんが、くな／＼と頬邊膨らしはつて、（嫌うて退けたら、妄念が怨むに、祟りがあるぢや、為になろまい。何やつたら、此の墓の地、一遍杖の先で、穴明けよか。女子の小ツこい骸骨や。土蜘蛛はどの破目やつたら、ちやとつと隠れる。・・・・・其の華手向けて、水掛けて遣あされ、仔細ないこツちや。）

言やはるとな……身構やはつたえ、がツしりしやはるのンやが、ぐな／＼と、よぼける腰据ゑてな、竹槍見たいに、杖を取つて、突懸けはる。」

言ひつゝ、吸掛けた、黄金の細打の煙管を斜に、しつかり取る手が震へたが、屹と見た目は露を帶びた。

「私、口惜しはけな、……其の杖を、はツと、手に持つた枝で拂ろた。室咲やよつて纖弱うおすやろ。ほろ／＼と紅梅がこぼれたはけな、アツと思うて、袂で包んだ。

（留めて貰ひます、……お墓のは美し人だつせ。一緒に入れて、どないします。）

と、いつしか血相したやないか。

ニタリ／＼笑やはつてな。

（美し人や、和女のやうにか。淺猿しい。……其が迷ひぢや。墓なは男か、女子かの、業平でも小町でも、死んだら、青膨れぢや。此の髑髏ぢや。……分けても此方衆は。）

言うて、私の風つき、じろ／＼と見やはるのンえ。

（多い事罪を造るよつてにな、尚ほ汚穢い、尚汚穢い。げえ／＼、）

〓するやないか、何うどすやろ。

（それ其の、半分皮がめくれて、大な目がうろ抜けて、十筋の長い毛がすく／＼と見える。あれ／＼歯齦が透くぞ、舌苔に蛞蝓がだらりと附いた。）

私な辛うて辛うて成らんよつて、聞かぬ振して手々合いて拝んで居た。あの、言はる事、キリ／＼と骨へ刺つて、わな／＼震へて來た。かなはんはけな、顔を隠いて、衝と走つて遁げたンどつせ。

（はれ、佛の道へ駈けて行く……其處で悟れ、轉びなや、轉びなや女子、）

言うて、ホウ／＼鳥のやうな聲出いて喚かはつたんえ。

其からだす。貴下、氣が結ばつて、胸の中をな、細い絲で括るやうどつせ。もうな、どないなと成れ、思ふけれど、……どないしたら可えか分らん。

私な、そないな和尚はんに、言はれんかて、果敢

ない事ばかし有るよつて、後生願うて忘れんのどすせ。然やかて、死んでから、鬱陶しい野晒に成る言ふ宗旨やつたら、殺されたかて、拝みへん。

貴下はん、然うやない言うておくれやして、私、ほんに嬉しおすえ。

けどな、あの、野晒に成る方が眞實でおへんやろか。私などは、尚ほ汚穢い言やはつた……分隔てせなんだらな、たとへ、死骸をかくしたかて、杖の先で、お墓の穴突つかれて、あの、蛞蝓べつとりの、まだ青い顔と、一ツ地の下に寝にや成らんえ、なあ。」

袖にひつたりと面を蔽ふ。

「大丈夫、私が受合ふ。其だけなら、弟子にもしよう。」

如何に美女、杖を拂つた腕の雪に、其の紅梅の散る色見しや。

十五

横雲がむら／＼と、美しい京の夜を、末濃に颯と一刷して、其の中に、柳の絲をすらりと渡した、東山は被衣を透いて、眉の覗いた俤である。

山の端の其の姿を、月の氣勢の薄あかりが、白銀の色の中に潜め、冴えた浅黄の光を擴げて裏から宙へ浮き出させる。山懷の眞暗な樹立の、濃い緑の綾が透いて……白衣の御姿彼處におはす、……清水のあたり青地の錦の帳が深く、月の影が逆さまに柳へさすかと、其の空ばかり澄渡る。

色電燈と、軒行燈。店灯で、八重に七重に丹に碧に、はた紫に彩つた、祇園町、先斗町、宮川町の夜の空は、鞍馬の使、比叡の音信が、眞魁に花の廓へ……風に、雲に、花の模様を送り來て、淀んだ靄のたゝずまひ。星は曇つて眞珠のやうで、鴨川の水の朧の中を、紫濃く、千鳥の羽たゝく音が通うて、冷たき小石に觸るときさへ、ちら／＼灯の紅が走る。

蝋燭の櫻、障子越。

闇には迷ひ、　月見ては、悟るもよかろ、然りながら、
私や朧夜何とせう、　結ぼれ解けぬもつれ髪。

二階の水調子の絲を渡つて、祇園のお岸は微醉の小褄を投遣に、片手を忘れた懷手。色も直つてほんのりとした微醉機嫌で、先斗町の川岸から、茶屋小屋の裏を繩手へ通ふ近路の、竹村橋へふらりと出て來た。……狭い橋で、竝ぶと欄干へ擦れ／＼ぐらゐ。で、離れた前へ、日和下駄の音をかた／＼、と其も蛙の鳴くやうな、眞黒な姿は旅僧。

「一寸お待ちやすや。……案内者の私が後に成つて、何も成らんな、貴下、一人で然やつて行かはつたら迷子に成るえ。」と細り優しいが冴えた調子。立留まつたやうであつた。

「まあ／＼此處だけは仔細なさゝうだ。橋は一條です。」

「私には二條に見えるのンえ、ほゝゝ」と花やかに笑つて、左の欄干へ、ふらりと寄る。ト遠あかり

で、瞼もほんのり、そよぐ川風、輕い吐息。

「醉うたかいな、私、貴下はんの言うておくれやしたお庇やな、嬉して、かなはんよつて、醉うたえ。澤山飲んだえな。……

あの、お墓に居やはる人が亡うならはつて此方、恁うした事一度もおへん。……大可へ行て、お客はんに逢うたら、又どないだすやろ。

チヤラ／＼電話かけて急かしやはつて、私、嫌ひや。貴下もう行かんと置きや。」

旅僧は、がた／＼と引返した。

「阿女が承知で、參らんで濟む事なら、其に上越した事はない。此のまゝ御免を被つて構ひませんか。」

「構ひます、構はいで何ないせう。……貴下、御免被つて、何うしやはるンえ。」

「先刻の人に、ことづけを阿女に願つて、私は固より行脚のものです、それ相應に參ります。」

「一人でな。」と輕く云ふ。

「誰と一緒に歩行きますな。」

「まあ、阿房らし、」と莞爾して、

「然やつて別れるほどやつたら、早う畷に行にまつせ。其が可厭やよつてにな、此處で思案しとるのどす。藥湯の町の家へ行たかて、座敷へ出ずと居られへんし、何ないしよ。あゝ、」

と白い手で胸をたゝいて、

「嵯峨へなと走ろか。」と、串戲らしう眞顏に成つた。

「まあ／＼、そんな事言はないで、兎に角、其の大可とか云ふのへ參りませう。」

「然やつたらな、手曳いて行ておくれやすな。」

十六

「可厭どすやろな。」

お岸はくるりと身を返して、背を欄干に凭す、身動ぎと、水のそよぎに、はらりと解ける片褄を、膝で合すと、輕い駒下駄の音がした。

「可厭も何もありませんがね、……恁うやつて、揃つて歩行くのさへ、晩方とは違ふ、あの、廣告の色電燈で、怪しからん寫眞を極彩色で見せるやうに思つて、四條の橋を通るのも、其で遠慮したんです。……まさか、手を曳いて、……渡初の尉と姥ではあるまいし、」

と詮方なさゝうに笑ひながら、

「不躾ですが、決して可厭と云ふではない。さあ、出掛けませう。」

「一人でおいでやす。私、知らん。」と、爪楊枝も含まぬが、俯向いて澄まして居る。

「ぢや、何うするんだね。」

「これから向うへ渡つたかてな、私、大可へは一

緒に行かんえ。可厭らし、あの、烏はな……」

「烏……とは？」

「私たちを待つてやはる、大竹はんの事だつせ。翼擴げて鴨川べりを、はた／／飛舞やはるによつてや。」

「成程。」

「聞いておくれやす、晝間もな、外套の袖の中見たら、私と同じ亂立のお召の衣服着て居やはつた。紅いものは入らいでも襦袢やかて、同一柄の友染え。後から／／誂へはる。裾模様でなかつたら、初手見た時縞が合はんと、六條の家へ揚屋から使ひ走らいて、上下同じ柄をば取寄せて着替へるのンどす。私、座敷へ行くのは可厭や。」

「阿女が可厭なら丁ど僥倖、……私は此で失禮します、何分其の方に願ひたい。」

「然やつたら連れて退いておくれやすか。」

「串戲ばかり。」

「貴下がツゝと去なはつて、後で私、尋ねられたら何と言ふ。」

「其處は隨分宜しきやう、坊主は千茂登の下駄を穿いて、駈落をしたとでも、何とでもな。」
「阿房らし・・・・・そないな事云へますやろか。でもな、眞個駈落やつたら、嵯峨へ行にたい。」と密と手を、其の旅僧の胸に當てた。

あしらひ兼ねたか、其の手を庇ふやうに、檜笠で輕く壓へて、
「困つた嬰兒はんだな、何うして下さる。」
「私もどないしよ。」
と鴨の水の流るゝやうに、綾が靡いて肩を振る。
其の姿が、朧の中に、黒く艶やかに水際立つた。

東山の頂は、刈あとの去年の薄も穂に出るやうに、白い雲がちら／＼動いて、黄金に淀んだ靄が淡く、月の出汐が颯と蒼い。
時に風が渡るやうに、すら／＼として角のない、しかし、威力のある瀬が響いた。
二人は言合はせたやうに、フト聞澄ましたのである。
旅僧は俄然として、ものに悚然とした状であつた。

「や、潮がさすか。」
「何言やはる、ほゝほゝ。」
と小さく笑つて、
「東の方はな、時々そないな事言やはります……隅田川やおへんえ。」
「之は……いや、恐入つた。」と、聲高に之も笑つて、胸を反らす、ト手が放れる。

「疏水のな、瀧に成る落口どす……凄うおすえ。颯と上から飜つてな、向う岸の、あの暗の中が此の音え。あれ、橋が一寸明る成つた、お月はんが出やはりますやろ。」
「此の中に瀧があつたら、嘸好い景色だらうね。其を見ながら、さあ早く行きませう。」

「些とも可い景色やおへん、恐ろし……澤山、人が落ちて死にやはる處やよつて、此の橋も寂いのどす、怪我にでも、辷つたら、最うな、どないしたかて助からんのえ。」
と伸上るやうにして、屋根の黒い、山の白い、祇園の岸を透かすやうにしたが、

「あツ、然うや。」

衝と叉旅僧の袂を取ると、駒下駄がコロリと鳴る時、幽に山の端の光が射す、細い片頬に蒼みが映つた。

十七

「私、彼處へ行て、疏水の瀧へドブンと入ろ。……貴下に分れた後やつたら、死ぬと蛞蝓の附着く汚穢い骸骨に成ると可厭や。然やはけ、其のな、琅𤦺の珠に成つて、龍宮の簪に成る言うて教へてくれはります貴下に見て居て貰ろて、水へ入つたら嬉しおつせ。

何やして居たら、別れんと成らんよつてな……ーー私、ちやと一遍死のか。」

と言ふが早いか、裳はら／＼、橋の上を走り出す。

「困らせる。」と聲を懸け、串戲とは知つても棄置かれず……檜笠を確乎と取つた。片手で追縋つて袖の端をぐいと引く。

と黙つて、故と焦躁たやうに、水の上の姿を曲ると、菖蒲の影を流が搖る……其の俤は白い花、……竹村橋は朧である。

「然やつたら、はじめから、手を曳いてくれはつたら可いやないか。」

「畏つてござる。」
と風呂敷包を引掛けた手で額を撫でた。
「まるで、之は、駄々兒だ。」
「憎らしおすか。」と莞爾する。
「いや、何ういたして、」

「わや言はいでおくれやす……誰にかて最う私な、去年から甘える人はないのンえ。」
と▬然としたやうで差俯向く。寂しい姿を凝と視た。旅僧もフト黙つて、其のまゝ姿が重つて、橋のやがて半ばを渡る。

ト僧が行く……左側の欄干に、びたりと着いて、悄乎と一人、髪が朧に、額、頸許に亂掛つた、顔も黒い影の婦が彳む。

此の橋には、藝妓、舞妓の口からながら豫て獺が出ると申す……分けて疏水の落口には年々人死が少くない。間一町とは隔らぬが、四條は燈の花の大路で、此方は一條の松並木。……祇園と先斗町と同じ流れも、瀬が替つて、膚合ひの違つた從姉妹同

士、一ツ棟に棲みながら、母家と別亭と渡殿で離れて、つい雪洞を點しても、東山の月雪に往來の出來る處だのに。……螢でも飛ばないと、滅多に雙方から往來をせぬか。雨の夜に一ツ渡る提灯などは、眞葛が原へ狐の飛脚が行くやうに、三味線を彈きながら、舞ひながら見て怯えるくらゐ。で其の晩など、四條の晝芝居が夜へ掛けて、まだ刎ねる時刻でもなかつたのに、人らしい形も見えぬ處……

一目之を見て、お岸ハツとしたらしく、旅僧の廣い袖に、身體を隱すやうにして、肩を窘めた。

其の時、ふら／＼と、……僅かな風にも心許ないまでに、欄干を力に立つて居た婦が、擦違はうとする旅僧を見たと思ふと、ぐな／＼と成つて、橋板の上へばつたり支いた、膝も襤褸、其處へも髪の毛がさらりと落ちた。

黑い繩の、朽ちて千斷れたやうな中に、節の高い、骨かと思ふ兩手を支いて、ほツと切なさうな太息を吐きながら、

「お助けをば願ひます、旦那様。」
と言つた、聲はまだ若かつた。
「内の人に棄てられます。小兒等は煩らひます、お慈悲をば願ひます。」

「御報謝します。心ばかり。」
様子を見ると、……早や懐中を掻探つて居た旅僧は、しをらしくも投げても與へず、及腰に手を伸ばす。

「はい、はい、お嬉し事でございます。」と云ふも震へながら、押頂いた、が、一枚の紙幣で。
渡すと、見返りもしないで、旅僧はづか／＼と通る。

驚いたやうに、フト髪を捌いて、欄干より低い處に、足許を這ふばかり、低く擡げた其の額は、何故か、藍のやうに、眞蒼に、ぼツと見えた。
山の影か、橋は來た處を半ば、出汐の月をうけて、此の邊から疏水へ掛けては、靄も次第に暗いのであつた。

十八

祇園の畷、大和橋上る處大可うち。お久類と云ふ赤前垂。腰も膝もぼつとりものが、ちらめく蝋燭の灯に、細い目で、

「お岸はんはな、貴下、一遍家方へ歸らはりましたえ。」

「家方へ歸つた？　何や云うて、……阿房つくせ。」

と奥二階、下階から通ひ口の眞正面。床の間を左に取つた眞中に、桐火桶を二個左右に控へ、胸を張り、袖を擴げて、兩手を大の字形に當りながら、二人づゝ、四人の舞妓を、兩の袂へ、押包むだ如く引附けて、藝妓をづらりと居流れさせた、自から號する鐘に、五色の綱を曳いた和八大盡、四角な顔に角を立てゝ、

「私が今、此の坊様の迎に出た時、一緒に入つて、茶の室の八角火鉢の根際で、スパ／＼煙草喫んで居たやないかい。」……目を据ゑる。

「然うどしたけどな、お座敷へ出るやよつて、……

…着るもの着換て來る言やはつて、ちやつと家方へ去なはつたンえ。」

「然よか。」

何か氣抜けのしたやうに合點した。當人の和八は氣附くまじ、飲酒んだ氣競ひに羽織を脱いだ、襲ね小袖は、上下對。鼠地に藍と紺の亂立のお召縮緬、お岸が着て居たと、寸分違はず……座に着いたばかりの旅僧に對して、故と居坐を正したは可いが、顔ばかり正的に据つて、醉崩れた膝から溢出した長襦袢は、雪輪崩しに笹の葉で、恰も可、紅氣が無いのであるから、お岸の其と同一である。

旅僧は蒲團の上に、腰法衣に手を置いて、其の體を黙つて視た。

渠は床の間に直された。

何の意味も無いのであらう、壁には竹林の七賢と云ふ……大幅が掛つたが、點連れた酒の海の不知火に、賢人の顔は、髯が流れて皆赤い。

青銅の花瓶に、眞四角な活方で、柳が添つて。可

哀や乙女椿が、黒板塀忍返しの妾宅へむざと捻込まれた風情に見える。……草も木も、わがおほきみの國なるに、……一刀流は惨酷らしい。

其の傍に、檜笠が、置ものゝ體に、ボン、とあり。

それ、來たわ、と言ふと、待構へた和八が、藝妓まじりに、ぱた／＼と下階へ下りて、お岸と二人が柳の暖簾を潛つた處を、燕の巣も崩るゝばかり、もの騒がしく出迎へた。念も入つたよ。中戸口の土間に置いて洗足盥の用意があつた。

「草鞋や無いのか。」

「千茂登とか申すので穿替へて參りました。」

「此方は穿違へた、わはゝゝゝ。」と機嫌よく笑ふと思ふと、

「湯も沸いてある、折角ぢや、お洗ひ、」

と極めつけて、

「誰なと洗足を早う汲めや。」と大きな聲。

樓では逆らはぬに極めて居る。

「あい／＼。」

此の間上框で、雙方が猶豫つた。

「何や、貴下、お足お洗ひやす事ないやないか。」
と吉鶴と云ふ姐株、ー公園の群には居ないで、新たに加はつた年増の藝妓が、立ちはだかつた鐘の背越しの松、黒ずんだ衣裳で覗きながら、氣の毒さうに然う云つた。

「黙つて居なはれ、門に立つ坊主どもが、之から大盡附合ぢや、其の足洗はすが何ないした！」
と些と聞えよがし。

「はい、はい。」
頷くやうに叩頭して、背後向きに、風呂敷包を持つたまゝ、腰を落すと、青疊に籠行燈。其の一段高いのが、浮き上るやうに見えて、思の外、懸ける處が低かつたので、もろに、尻餅をトンと搗く。

「あれ、」
とお岸が小褄を挾んで、
「おつかまへやす、」と入身の肩、盥に枝垂るゝ柳の姿。

十九

赤前垂の裳を曳く、浅黄の蹴出、圓い手で、お久類が差出す籠行燈。　ー　盥の中には僧の足より、お岸の手さきが白うちらめく。

「わはゝゝゝ、」と唐突に笑ふと思ふと、和八が自分に檜笠を引取つて、「さあ、お上り。」と言ふが早いか、背後に居た、其の吉鶴をドンと突いて、壁によろめく襖際を、どたばた二階へ駈戻つたものである。

「頂戴、はい、頂戴します。」

旅僧は數珠をこそ手に懸けぬが、べろりと成る袖を背後へ刎ねて、鼠木綿の膝を四角に、床の間を背負つて端然として、藝妓が指した小杯。肩を斜にして、乗出した様子は、殊勝にも見すぼらしく、木賃の夢に重齋の體がある。

和八は横推しに友染の蒲團を摺つけ、

「やあ、措けい。」
と其の盞を獻す藝妓を留めた。
「駈着け三杯云ふは天下の相場ぢや。そないな、舞妓が欠伸したやうな、ちよんぼり猪口を何うするのや、」
と傍に坐つた一人の、舞妓の臘細工のやうな耳許を、平手で撫でゝ、
「なあ、こないビードロやさかい、欠伸の風鈴や、鐘流の此の硝子杯で參らう。さあ、御坊、」
と忙しさうに、……前にあつた硝子杯を二ツカチリと合はせて、
「其で、御坊一ツ呼吸せずに頼むでんす。」
「はい、えゝ、一時に二ツで頂戴をいたします事で。」
「ビールあがりまつかいな。」と仲居が前垂の膝を其方へ。
「そないな泡沫立つた茶、何するぞい。御坊や思うて、お茶湯申そと早合點でけつかる。然やないわい。

吉鶴、……例の酌や。」

と睨むやうにじろりと見る、ト其の女が心得て、ブランデーの壜を取つた。又一人が白燒の水差を揚げて、蝋燭の灯にちら／＼と、燃出る八ツ口、かツ散る褄。いづれ劣らぬ祇園の花が、酒と水とに色を分けて、二人が兩方から、するりと寄る。

「御坊見なはれ。」と言ひながら、揃へて兩方から衝と酌がせて、なみ／＼と雙の硝子杯に湛へた。

「可い。」

大きな聲で、頷いて、控へさせ、

「佛蘭西では恁うして飲む。……御存じかは知らんが、巴里で遊女を買ふ時、儀式で之を遣るでんす。……私は一昨年から、去年と行て居て、や、も、立續けに遣りつけたで、猪口などでは、とんと叶はん、」と胸を眞直に立てゝ横柄に云ふかと思ふと、がツくり俯いて、頭を掉つて、

「東西ぢや、東西ぢや……呼吸せずにぐつと一口、誰方も其にて、お目留められ、御一覽。」

輕口重々と喋舌るが疾いか、二ツの硝子杯を一口

に、水と酒を一緒に引いて、眉を顰めながら、また鼻を皺めながら、眞仰向の煽切。

「ふウ、」

と吹いて、

「一滴も、それ、溢さぬ處を御賞覽、」と、云ふ脣から、垂々と、いや、だらしなく胸へこぼれて、長襦袢の笹の露。

舞妓たちは横を向く。

「ほん、そないにしてお飲りやして何うもないか。」と仲居は向直つて眞顔で云ふ。「毒え、」

「なあ……」

と藝妓は二人で、和八に云つて、……目はしんせつに僧を見つゝ、其となく、留めよ、と教へる。

「何が毒や。ぜゝ裏で黒女買うて、鯨を生づくりで食ふ鐘でんす。……ブランデーの噴水、蚊の涙ほどにも思はん。和八受合ひます、……さあ、御坊、さあ、御坊。」

二十

「や、見事なもんや、豪い。」

和八は旅僧が其の二ツの硝子杯から、ブランデーと水を一息に呷つたのを見て、仰々しく手を拍つた。

「さあ、今一ツ何うや、それ、吉鶴、小美那。二人して一度に酌いだり。」と氣競つて言ふ。

旅僧は手を擧げて、

「なか／＼、之は、何うして容易なものではございません。最う重ねては頂きますまい。」

「お岸の酌でなうてはあかんか。」

と小鼻の邊に皺を深めて、

「お久類、何うしたんや、遲い。急いで逢ひましよ、云うて遣らんか。」

「承知してやはけな、直きに來やはりますえ。」

「一向、當に成らんが、まあ可え。餘り遲いと、私が又鐘を鳴らすよつて、然う思うて貰ひますわ。

然したら御坊、待つ間が花や。……私が肴するよつて、もう一ツ飲んで貰ひます……さて、御さかなには何よけむーーとある……えへむ、」

と咳拂して、眞直に座を構へ、神妙に膝に手を支く。

吉鶴が、繕つて、

「何ぞお聞かせやす。」

「心意氣でおすやろな。」と小美那と云ふのが三味線を取つた。

「何ぞとは何云ふのや。之を、と望め、何なと聞かせる。何ぢや、望め。」

「さあ、何やろな。」

と仲居と小美那と兩方へ目遣ひして、成りたけ難儀せまいもの、と吉鶴は吸ひかけた細い煙管を火鉢の縁へソツと掛けて、うつかり考へると、舞妓が傍から、黙つて其の雁首の吸殼を火箸で穿る。

「お客はんのお肴やよつて、貴方の可いものをな。」と仲居が捌く。

「御坊はん、お望みやすえ。」

と小美那が、手巾で三味線の棹を一ツ抜いて見返つた。

「望むと申して。私などは……何でも結構でございます。」
「旅を歩行く坊はんぢや、腹に堪るものが可い。」
一つ憎い口を利きまながら、
「實の澤山ある淨瑠璃何うやい、可えか、可えか。
ーー　然らば此の處、艶姿女舞衣語りまする太夫竹本和八、はゝゝはゝ、三味線彈きのやうやな。えゝと、竹本和太夫、はまゆふと聞えるわい。志摩國の名物鮪の乾物ぢや、之を御坊へ肴かい。」
「お師匠はん、見臺。」
舞妓が其處へ、紫の天鵝絨の脇息を寄せて据ゑた。
「お照らし、お照らし……」
と和八の呼ばるゝ聲に、燭臺が二挺びたりと直る。
其時、舞扇を押取つて、しやくひ上げるやうに掌を一つボンと拍ち、据首を揉み上げながら、
「……今頃は半七さん……」
「よう／＼、」と、聲がかゝる。
「何處に何うして御座らうやら、今更返らぬ事ながら、私と云ふものないならば、舅御さまもおつう

にめんじ、……去年の秋の煩らひに寧そ死んで了うたら、かうした歎はあるまいもの、」

眞赤に成つて、はたと脇息に額を當てゝ突臥す、かと思ふと、仰向に反るが疾いか、ぐつたりと成つて、左右へ、べた／＼と腰を崩す。……忽ちしやつきり張つて、ぐいと肩を聳かす、平手で頬邊をひたりと敲く。扇子拍子をストンと外づして、見臺はづれの疊を打つやら、ぶる／＼わな／＼と震ひ上つて、調子づいて乘出す反跳みに、じり／＼と蝋燭で小鬢のはづれの、少しちゞれたのを、チヤリ、と燒くやら……其の毛を鷲掴みに我手で〓る、節と一緒に引張り落して、わつと泣く、……いや七轉倒見八倒見て居られず、一座諸聲に哄と笑つた。

「何が可笑しい、小兒め、笑うたな。」

と舞妓を一人突飛ばす。あ、と云ふ間もなく、ばつたり倒れる。

二十一

「あれ、」

と驚く、最う一人の舞妓の耳許を、返す平手でびしりと當てた。

花かと思ふ蝋燭の紅を散して、美しく輝く中に、名所に描いた霞のやう、すら／＼と見臺さがりに、袖を連ねて綾に錦を織交ぜた、白粉の香もほんのりと、紫立つて籠つた處へ、虻の聲が風に變つて、哄と黒雲を捲落せば、座敷は宛然小袖幕の吹亂された風情である。

「此の聾めら、」

と竹本和太夫、濡れた脣に白泡を噛散らいて、

「何奴の耳も木耳か。やい、浄瑠璃は泣くもんぢや。……あは／＼笑ふ奴が何處にある、怪體な！何さらす。」

で、睨め付けたが、醉ひしれて目は開かず、眦を裂けるばかり、びく／＼と戰かせて、青筋を額に畝らす、……酒の上なり、酒落に怒つた様子で無いから、顔を合はせて、座も灯も白け返つた。

直ぐに見臺を刎返す。慌てゝ仲居が燭臺を後へ引いた。

和八は膝を突掛けて、

「何うや、和尚、えゝ、道心坊。浄瑠璃は笑ふものか、ーー其も茶利場や無いわい、三の切の愁歎場語るんや。何うや、和尚。」

「はい、之は泣く處でございますな。」

「泣く處？　屹とな。」

「然やう。」

「泣いてくれ、泣く處なら泣いて貰ひます。わつと一つ頼まうか。さあ泣け、えゝ、泣いてくれ！」

と立身上りに、其處に引轉覆つた脇息を引掴んで、ドンと疊に打附けると、煽りに燭臺が一つ、ぱつと消える。

「ほうい、おうい、」と、旅僧は悲しげな聲を擧けた。

一同顔を見合はせた。

お岸が其處へ、裳を曳いて、すつと出た。

「ちやツとな、襖の背後で聞いて居た、吉鶴はん、姉はん、お泣きやすや。」

と前褄を合せながら、立姿を消すやうに、旅僧にひたと寄つて座に着くと、

「私も泣くえ。」

と袂を取つて、顔に當てる、と顔の月が隱れて、末濃に藤の袖が落ちる。

言合せたやうに舞妓まで、齊しく面を蔽うたのである。

時に赤前垂の諸膝支いて、仲居は消えた蝋燭に、燭臺の灯を移したが、一同、差俯向いた黒髪の黒さに壓されて、其の手許さへ暗かつた。

御大將御感あり。

「はあ、お岸はん出來た、皆も豪出來ぢや、よう。」

と差上げるやうに兩手を伸ばして、高笑ひをする、と顔の色が又蒼褪める。

「小兒、酌げや。」

と件のブランデーを呷りつけ、べろ／＼と舌なめ

づりして、
「さて、御坊、今度は、きこう一つ肴をしなさい。何の彼のと言はうより、座敷も陰氣や、踊りが可え。」
ぐら／／と頭を振つて、
「是非所望でんす。」
「千代次はん、松子はん、お立やすや。」
と吉鶴が引取つて、目配せする。
蝶々二つ羽繕。

「措けやい、」
と又怒鳴つて、
「憚りながら、六條の住人や。舞妓の立方茶粥でんす。今更見たい事些ともないわい。」
「然やよつてにお客はんにお見せやすな。」と仲居が言ふ。

「別の話や、そりや、」
と眞面目くさつて、膝を叩き、
「私に肴して貰はう言うとるんや。和八へ振舞の

ため、御坊に踊を所望するんです……喜選やつたら正のものやが、何やろと段ないでんす。目なと足なり、そりや、くる／／とまはしたり、舞うたり、踊つたり、さあ御坊、御坊。」

と後上りに、喚いたり。

二十二

ものに逆らはぬ旅僧も、之には、もつけな顔をして、

「泣けとおつしやるには泣きもしました。が、舞、踊などゝは何うも……一向不調法でございます。」

「不調法、段ない。うゝむ、些とも上手なのは見たうない、平に所望でんす……御坊、さあ、小美那何なと彈かんかい。これ彈かんかい。」

で向直つて詰掛ける、血相がー件の蒼白いので、小美那はおろ／＼しながら、

「然やかて、何を彈いたら可いのンどすやろ。」

と困つた顔して眉を顰める。

「坊はんに聞いたら可えが、踊手に聞かいで誰が知るもんぢや……さあ彈かんかい。えゝ埒の明かん、チヨツ腕ツ節を挫ぎ折るぞ。」

「あゝ、痛、貴下はん。」

と膝を煽つて、べつたりと三味線ごと、仲居の胸

に倒れかゝつて、小美那は泣聲。

屹と成つて、お岸が襟を掻合せた時、旅僧は正面へ向直つて、づいと出た。

「踊りませう。」

「豪う濟まん事どすな。」

と氣の毒らしい流眄で、吉鶴が三味線を代つて取つた。

「何を彈くのどすえ。」

「えゝ、何も心得はしませんから、構はず御勝手にお彈き下さい。」

「然したら、若旦那、お好みやすえ。」と仲居が言ふ。

「然よぢや。」

忽ち機嫌が直つて、

「坊さん忍ぶにや暗夜がよい、……でもあるまいかい。……わしが在所の替歌よかろ、東西、東西！　鮪踊りのはじまりぢやい、」と拍子に掛る。

チン、トン、シヤン、と彈出す。揃つて唄ふ。

空が曇れば、雪がちら／＼と、
これぢや堪らぬ熱爛で、
飲めば其處らへ打倒れ、トンと、
色氣も戀氣もないわいな、
起してやんな、ヱヽ／＼、

旅僧は、すつくと立つて、大跨に廻りながら、もさりと腕を出す、のさりと歩行く。差す手引く手に大きな影。荒海の障子の繪から、ずばと抜出したものゝ如く、魔が魅すやうで、可笑いよりは凄かつた。

氣の毒さと笑止さに、女たちは顔を背けた。
一人、お岸が凝と目も放さないで視めたのである。
「いや、づんべら、づんべら。」
餘り曲がないと思つたか、旅僧は、差す手の腕の處々へ、陀羅尼音の調子を取つて、
「いや、づんべら、づんべら。」
シヤンと澄む。

「喝采々々！」
眼を細く、大口を開いて、高笑ひで、和八ぐツと反つて、
「豪ら出來ぢや。」
と讃めるが早いか、突のめるやうに脇息にドンと凭ると、
「あはゝはゝ。」と兩の肩を搖り上げつゝ、ひよいと、顔を擡げて、けろりとして左右を〓はし、
「之は誰方もよくおいで。はあ。綺麗なこつちや。」
と坐り直つて、
「時に、御坊よう舞うておくれなさつた。六條上る所の住人、和八、禮をします。屹とお禮をしますわ。」
「禮なぞと、飛んだ事を……」
言はせもあへず、押被せて、
「大學に曰く、謝するに禮ありでんす……お望なされ、えゝ、御坊。」
「然やうなら、」
其のまゝ正面に座を正して、
「種々御馳走に成りました、……不思議の御縁

で。しかし時(とき)も經(た)ちました。之(これ)で失禮(しつれい)がいたしたうございます。手前(てまへ)、何(なに)よりも其(それ)が望(のぞ)み、誰方(どなた)もおとりなしを願(ねが)ひます。」

と居竝(ゐなら)んだ女(をんな)たちを、……分(わ)けてお岸(きし)の顔(かほ)を見(み)た。

二十三

爾時、和八がまだ答へぬのに、お岸が何事も意を得た様子で、更まつて、

「一寸お待ちやす。千茂登でも飲つたはけ、御酒は最う御迷惑やろ思うたよつて、私、今此處へ來る時にな、然う言うて、釜を掛けて貰うたのンえ。内には、圍があるよつて、階下へ行て、茶々一つ上げまつせ。見苦しいけど、私がたてますよつて、よばれて行ておくれやす。……其に、晩う成つた、お泊りやつたら、支度させるはけ、此家へやすんでおくれやすえ。」

と一寸々々和八の方に目遣ひしながら、氣を兼ねた状も見えず、我が事するらしく澄まして言ふのである。

旅僧は一議に及ばず、

「いや、宿の御心配は兎に角、何より結構な、其のお茶を頂いて參りませう。」

「御免やすや。」

と和八に言つて、お岸は早や立ちに懸る。

先刻から、脇息にぐたりと凭れて、然も疲れたらしく目を眠つて居た和八が、上目づかひで雙方をじろりと視て、

「待ちなされ、御坊、お別れとありや餞別する。やあ、女ども硯箱を之へ持て、と和八大將お聲懸りぢや。」

と自分で言ふ。

蒔繪したのが違棚の上にあつた。

「お岸はん、其の檜笠一寸貸した。」

早や座を立つつもりで、床の間に差置いた、風呂敷包と、其の檜笠は、お岸が既に兩方とも袖に取つて居たのである。

「どないしやはります。」と少し猶豫ふ。

「まあ、可えが、」

「然やかてな。」

旅僧が聲を懸けて、

「お構ひなう、御隨意に。」

和八が取つて、パツと脇息の蓋を置くと、引掬ふやうに含ませた墨べつたり、和蘭陀の蜥蜴の書體で、おきしのをつと迴しがきにのたくらせた。

目の縁の皺を刻んで、嘲る如く、
「何うや！　彌次郎兵衞所持之、とも何とも畫ぬ。英語や、こりや、」
と突辷らした、指で指して、
「お岸の亭主……どないなもんや。」
「おゝ、嬉し。」
とお岸は然り氣なく、風呂敷包を胸に當てた。
和八の目はどんより光つた。
「其を被つて、西へなと東へなと、勝手にとつとゝ去になされ。」
恁くても僧は、氣色ばんだ風情もなく、
「地獄、極樂、いづれへか參ります。」と言ひながら、檜笠より、お岸が手にした、其の包にのみ……何故か目も放さず、
「誰方もお先へ。」と言ふ。
「やあ、待つたり、御坊、」
とまだ不足か、呼留めて、
「大學に曰く……謝するに禮ありぢや、知己に成つた記念といたして、何か欲しい。いゝや、頭陀袋の中のものなど、ほつても要らぬ。何なりと御坊が一筆望みでんす。唐紙か、絹か、御意次第取寄せ

るによつて、お認めあれかしと存じ候ぢや、如何に候。」

「之は……出來さへしますと、何よりお易い事でございますが、お恥かしいが不調法で、」

「其の不調法所望でんす。」と又こだわりかける。

「同じ事でも、踊の處はくる／＼廻つて濟みましたが、何か認めるやうにおつしやつては、逆觝斗も打てません、平に御勘辨に預りたい。」

「其處を願ふのが所望でんす……分らんな！」

と又喚く。

お岸ばかりか、吉鶴、小美那、其の他も、齊しく頼むやうに目遣ひした。

「止むを得ません、強つての事だと……手前認めるものがたつた一つ、其でも差支へございませんか。」

二十四

些と其の言葉が意氣込んで聞えたので、和八は氣を打たれた顔色して、

「はあ、何とある？」

「否、別に申出すほどの事もありません、身分がらお念佛を認めませう、南無阿彌陀佛と、其だけなら存じて居ります。」

和八は黙つて、脣を一つ嘗めた。

「そりや無茶や、こないした酒の席、安養浄土其のまゝや言うた處で、こゝで念佛をかゝれては何うも成りまへんで、」

と眞面目に成つて、

「可うおます、かゝずと段ない。」と左右に手を掉る。

フトお岸が、忘れて取落したかと、件の風呂敷包を下に置いた。蝋燭の眞がスツと眞直に立つて、座敷が寂寞した折から、疊に觸つた其の包の音は、ずしりと響いて重かつた。……旅僧は屹と視た。

お岸が打傾いて一寸案ずるやうにしたが、
「あの、然やつたらな、私が書いて貰ひますせ。御坊はん、な。」
「お易い事です。」
「其を、書きやはるに、一寸な、何にかて、大事おへんか。」
とうるみのある目をばつちり〓く。
「些とも差支へありません。」……と、和八で無い、此の女の言出す事、仔細はあるまい、と旅僧は信じたらしい。

言ふ下に、帶留がパチンと鳴つた、背負上が、胸に弛むと思ふと、錦の帶の虹なす中から、するりと裾模様の腰が、辷る……ト燃立つやうな緋鹿子の扱帶を解いて、對の小袖の一枚が、はらりと其處に裏を見せれば、友染の下透く、皓き、膚を取つて映したやうな、雪艶やかな白羽二重。

褄搔寄せて腰に結ふ、紅を引蔽ひ、目まじろがぬ色きつぱりと、
「御坊はん、大事なかつたら、此處へな、認めて

おくれやすえ。」
ずつと直つて、筆を取つた、法衣の袖も凜々しく見えた。
「南無阿彌陀佛、可いんですな。」
「はあ、何うぞ。」
と見詰めて言ふ。
墨の色鮮麗に、
「南、」と其の一字。
「無、」とお岸が次の文字の、白羽二重に映るのを見ながら唱ふる。
「阿、」
「彌、……」
と云ふ時、胸をそいで、薄着の肩がわな／＼と震へた、お岸は窘むやうに身を細めて、
「おゝ、寒、着るもの貸しておくれやす。」と膝を崩して衝と動くと、片手を支いた旅僧の左の袖を被いだのである。
蝋燭の灯が搖めいた。

座は静り返つた。

雲を分けたる顔で、お岸は墨染の法衣の脇から、

「何やら云ふ歌があつたえな、大谷の墓に居やはる、私の友だちが知つてどした。……こないした處をな、何云うたえな、……佗びぬれば、苔の衣は唯一重……」

「貸さねば疎し、いざ二人寝む。」……と旅僧はあとの句を口吟みながら唱名の傍らへ　ー一夜行坊ーーと名を署しぬ。

突然、燭臺がばつたり倒れる。と紅の守宮の如く、灯はちよろりと疊を這つた。殺氣、蜘蛛の巣の如く颯と掛つて、きやつと叫ぶ。あれえと泣く。

吉鶴の髻を掴んで、横のめしに引倒すと、其の手で、仲居の胸を仰状に突拂つて、躍上りざまに、和八の脛は、褌もあらはに、小美那の頤を蹴らうとした。

「わやゝな。」と落着いた聲して言ふと、お岸は其の解いた扱帶をスーと引きつゝ、すらりと立つて、

はつ、と抱く、……胸へかけて、和八の兩手を背後に引くと、綿の如く、くな／＼、と成つて廻すまゝに、ぐる／＼卷きに、きりゝと結んだ。

緋汲帶に卷かれながら、和八の體は、朽木の如く、諸脚を張つて仰向に■。

二十五

「願と云つて、何う云ふ事です……何も御承知の通りの私が、お引受け申すと云つた處で、たかゞ知れたものですが、しかし出來るほどの事だつたら、阿女のために、決してどんな事でも厭ひません。

恁う云ふのさへ、推の強いやうだけれど、まあ、話して御覽なさい、言つて見て下さい。」

と言ふ、旅の法師の果敢なげな其の姿ながら、聲も調子も頼母しい。

お岸の帶には、半襟の色より濃い、紫の袱紗があつた。

唯二人、數寄屋の内に對向ひ、で川向ひなる鼓の遠音が、千鳥なんど銘あるべし、松風の釜にチリ／＼と幽に通ふ。

「言うて見まつせ。」

とお岸は思入つた眸の色、凝と旅僧を瞻つた。

「承はりませう。」

「でもな、貴下はん、お聞きやしたら、屹と、吃驚しやはりますやろ。」
「吃驚する？」
お岸の取詰めた顔色に、故と豊かに笑を含み、
「いや／＼、……まさか坊主首欲しいでもあるまいと思ふ。お望を叶へられるか、どうか、其は別だが、大概の事には驚きません、構はずおつしやい。」

「えらう、御迷惑な事どすけれどな、あのな、貴下、先刻、祇園はんで見やはつた、あの嬰兒はんな。」
「……」
「あの嬰兒はんの父はんに成つておくれやす。」
と顔を視詰めたまゝで言つた。
僧は黙然としたのである。

「あ、貴下、然やかて、何の厚面皮しい！　私を女房はんにしてやないのンえ。嬰兒はんをな、其のな、風呂敷包みの中へなと入れて、持つて去んで、養うて、あめなと露なと大事おへん、養うておくれ

やす、え。」

と目まじろぎもしないで言ふ……其の風呂敷包は、膝に引附けて居た。而して和八が樂がきした檜笠は、中庭の縁先に俯伏せにしたのが、灯を入れた石燈籠に朧に見える。

眉秀でたる面を上げ、

「串戯ではあるまい。」

「眞劍どすせいな。」

「風呂敷包みに入れて行け、とまで言はれるからは、何も更めてお話しをするまでもない。が、可愛い兒を阿女、何うするつもりだ。山深く、野か廣けれは、雨露を凌ぐに辻堂もない。目下は素より、一生自分でも行方の知れない行脚坊主に兒をまかして何うします。行末何にしようと思ふんです。」

「何になろとな、どないしようとな、貴下はんに頼んだら、祇園の藝妓の兒で居るよりは増どすせ。兒にしやはるが厭どしたら、お弟子にしてやつておくれやす。」

「いや、其は尚むづかしい。此通り、頭に伸びた

毛も無いが、阿女、私を買被つて居やしないか。
打明けて言ひますが、實は身體だつて狼同然、法衣は唯着たばかり、何一つ修業をしたのぢやないのだから。」
と冷やかに、且つ自から嘲けるやうに言ふ。

お岸は身動きもせず端然として、
「何も教へずと大事おへん。大きう成つたら、貴下の通りにしてやつておくれやす。」
「行脚坊主にしようと云ふお心かい。」
「坊はんでもな、神官はんでもな、何やかて大事おへん。
貴下の年にならはつて、今月の今日やつたら、東大谷の門外へ通りかゝるやうにしてやつておくれやす。」

「私は取つて三十だ。
と其の兒が同じ年に成つた時、今月の今日、東大谷、あの、大谷の門外へ通りかゝらせてくれと言ふ。」
「あい、」

「而して……」
「然やってな、舞妓はんが二人で、袖ひいて留めやはつたら、手に持つた笠かぶつて、莞爾してな、頤を擽らしておくれやす。
其處へ行てな、祇園の藝妓や云うて手を支いて頼んだら、連立つて歸つてな、相乗で、可うおすか。
千茂登へ行て、千茂登の内でさしむかひに……」
と言ひかけてほろりとする。
僧は腕を拱いた。

二十六

「世帯持つたやうにして、二人して御飯たべておくれやす……歸途には手を曳いて竹村橋を渡るのえ。

お客はんがな、惜い金子遣やはる、むしやくしやの遣場がないよつて、酒の勢借りて暴な事言やはつたらな、」

と鬢暗く差俯向き、

「成らん處辛抱して、淨瑠璃聞いて泣いておくれやす。……何も知らはらいでも、立舞うてな、づんべらづんべら云うて踊つておくれやすや。眞に濟まん事どすが、私の我まゝよう聞いて、つき合うておくれやした、……泣きたいほど嬉しおしたえ。

矢張りな、私見たやうな女子をな、喜こばせておくれやすや。」

と旅僧にもの云ふのが、其處に嬰兒が居て、遺言をするやうに、可哀に、且つ云ふべからざる威嚴を帶びて聞えたのである。

旅僧は其の嬰兒を掻抱く如く、手を解いて胸を開い

た。
「お引受け申さう。」
「えゝ、」
「確に私が預ります。」
「眞個にどすか。」
「勿論！」
と顔を見合はせた。
「おゝ、」とお岸が、崩るゝやうに、爐の縁取つて、身を寄せて、
「然どしたらな、……欲を云ふやうどすけれど、……思ふ人に添はれいで生とる效がないはけに、死なう死なう思ふけれども、骸骨に成ると、目々や口へ蛞蝓が集るやろ思うて、其が可厭らして、死ぬ事出來いで泣いて居る女子に遇やはつたら、骨はな、海へ行て龍宮の珠に成る云うて、安心をさせる人はんにな、屹と、育てゝ遣つておくれやすや。私はな……思ひ置く事何にもない……」
と露の晃めく目許の微笑。脣の色は、蒼かつた。
「而して、」

「……」
「お岸さん……阿女は何うする。」
「御坊はん……死なう思ふばかりやない、生きて居られしへンえ。もしお聞きやす、……あのな……先刻、竹村橋で逢うた婦女のお菰がな。……この後で、私に言はれた事、口惜い云うて、疏水の瀧へ身を投げた。」
と言も投げて、斷念めたやうに言つた。其は事實であつた。

あの時、髪の亂れた、藍色の顔した婦の手に、旅僧が白く光る一雫の露を惠んで、通ると見ると、醉心地に氣の立つたお岸が何と思つたか、つか／＼と引返して、流眄に凝と視ながら、
「何や、」と云つて頭から脣冷く、
「あんた、足腰立つやないか。橋に坐つて、錢貰うて何しやはる。……見なはれ、あんたが、膝も腹も見えるやうな襤褸を引摺つて、地面に額つけてやはる間に、綾錦をば不斷に着てな、酒の機嫌を川風にふら／＼と男と手を曳いて通る女子があるえ。

しゆみてやなあ。何や、確乎しなはれ……御亭主に棄てられても、小兒養うてやが煩らふ言やはる。貞女やら、賢女やら知らんけれど、そないな事して居んと、藝妓にならはれ、此の川で垢落いて來てやつたら、私が廻いて上げまつせ、意氣地がないな。」

とせき込むばかり、早調子に、何為か、あせつて口惜しさうに云つた。

言ふものよりは言はれた方が、蟲の鳴く、息の詰る、微かな聲で、

「口惜い、口惜い。」

と絞るやうに、黒髪を戰かせて忍び音に泣いて云つた。

「口惜しかつたらお死にやす、乞食するより増どすせ！」

と言棄てゝ、カランと駒下駄の音を響かせた。

旅僧は爾時何も言はなかつた。

恁くて、朧夜にひら／＼と、舞妓の帶の金襴の蝶が舞ふ、大和橋を渡つたのである。

二十七

爰に言添へる事がある。

欄干に凍りついて、黒髪はたゞ鋼線の如く、すツくと立窘んだ其の婦を殘して、旅僧とお岸の姿が夜の柳にかくれる、と間も無かつた。

誰も通らぬ竹村橋を、齊しく先斗町の方から、ほく／／一人、ぼやけた靴の音で、踏んで來たのは、西石垣の床屋に居候。　ー　耳の垢取健沈君。

袖を川風に、ひら／／と、

「ばあ／／、」……と何か獨言を、……唄かも知れぬ、……餞舌り餞舌り渡つて來た。

夜はまだ早いが、店の親方が、鼻目金で、盆栽の塵を吹くほどの床屋であるから、職人の耳の垢が、宵出などは怪しむに足らぬ。

渠は此の界隈に久しい顔では無い。近頃から、緋褌のぼツとした暖簾と一緒に、件の店へ顯れたものだけれども、風采で誰でも目に着く。……

特に、日が暮れて手さへすくと、毎夜の如く、先

斗町、祇園へは入浸りの軒素見。

人の言ふことはよく分る。酒落を言つてもニヤリと聞分けるはどだけれども、當人一向な唐人で、唯ばあ／／。

動物園から信天翁が流れて來たやうに、をかしがつて、珍しがつて、舞妓などは行歸りに、きやつ／／玩弄にからかふ。

「ばあ、ばあ、」と其の何か云つて、今夜も之から、素見の道中。

欄干に彳んだ、件の蒼い婦を、よくも見定めないで、

「ばあ、ばあ。」

と變な辨髪の色目づかひで、前を通つて、最う渡果てる處で、一寸振返つて見たトタンに、蓬の如き髪の中に、凄まじい目の色して、鐵漿を含んだ、上下の脣白く、ニヤリともの凄く笑つたので。

「わツ、」と怯えて一目散、燕人張飛に睨まれた、

魏の國の陣笠の如く、新地の暗へ遁込んだ。

婦が、疏水の瀧へ身を投じたのは、それから幾程も無かつたのである。藝妓に辱められたゝめに、口惜しさの餘り溺死したと云ふ風説は、早や人々の口から、祇園の其處此處へ傳はつた。

「丁どな、私、お客はんと對になるのが可厭やはけ、戻つて、衣服をば着換へてな、……屋方を出ようと思うたら、其の風説しとるのどす……死骸捜しに巡査はんやら出てやはる最中や。

疏水で人の死なはるのは、覺悟やら、過失やら、毎々の事どすよつて、誰も慌てやはらん。

それにな、婦女やけれど、物貰たら云ふよつてに、此家の二階など、誰もまだ知らはらんえ。けどな私聞て、ドキリとした。

何や云うて、竹村橋で惡體したやら、今思ふとよう分らんえ、夢のやうどつせ。……晝間、大谷はんの山門で、草刈の子に、お錢持たいたのをば、汚

れる云うて、拂ひ退けやはつた婦女の顔に肖て居たよつてな。かうした稼業するはけに、家やら、藏やら、何うやら云うて、私をば怨んで居やはる婦女もあると聞いとるはけな、……むら／＼として氣が上つて、前後がわからなんだえ。

人一人死ないたによつて、もう生きて居られやへんのンえな。

そればかりやおへん。今日もな、實は、大谷はんのお墓所で、死なう思うて行つたんどすせ。けどな、餘りむさい事、坊はんが言やはるよつて、骸骨が悲しうて死におくれた。

貴下はんが、あないに言うておくれやす……唯た一ツ心がかりの嬰兒はんも連れて行ておくれやす云ふよつて、私な、恁うして居ても、月が見える。……あゝ、影が射す……」

と半ば開いたる、白銀を以て張れるが如き小縁前、恰も鶯の映る風情に、白玉椿の花の影の宿るを視た。

機會を思へ？

精舎の鐘こそ響かずとも、冷たき夜半を何事ぞ！

：

「もん／／／／、わん／／／／、ぐわん／／／／／／、」

どし、ばた、づしん、とものゝ音。釣鐘の和八が、

眞上の二階で。

二十八

故とであらう……其とも酒の醉に堪へなかつたか、這奴、二階の縁へ出たと思ふと、がツきと欄干に凭れた音して、

「げい、」

と喚くや、廂はづれに、したゝかにこそ吐いたりけれ。飛石掛けて、燈籠の苔蒸す根へ、蒼い霜が粘土の如く落ちて、胸吐くばかりの酸い臭が芬とする。

お岸は思定めた、其の白臘に美しく刻んだやうな俤して、瞳を返して見遣つたが、

「大事な席へ、何するえな、むさや……」

と旅僧を一寸見て、極り惡さうに恥らふ色して、衝と立つと、花の影かと見える、月明りの小縁へ出て、袖垣の此方に緑も深い、石の手水鉢の柄杓を取つて、月に練絹を灌いで投げた。

汚穢を拭ひ去らうとしたのである。

水よ、それ湯よと、二階で騒ぐのが手に取るやう。數寄屋は、恁くても、二人の影、月、松の風。

「あゝ、清める水がたらんしなあ。」

水は早や汲果てつ。お岸は、口惜しさうに屹と云つたが、帶の黄金の水仙凛々しく、雪の小腕白く揚つて、竹の柄杓の柄を高く、手水鉢をハタと打つた。

響に應じて、玉を重ねた、水は、さら／＼と湧いたのである。

と見ると、石の縁を蒼く溢れて、白銀の絲晃々〳〵と、袖垣の袖に繍取するやう、音を立つゝ、颯と落ちて、飛石の上を洗ひながら、八ツに走つて、母屋へ通ふ、橋がかりを、潺々〳〵として流れ流るゝ。

知らずや、今は世になけれど、祇園に聞えた此の揚屋の老主人。宗如と號して、斯道の達人と呼ばれたのが、顋に長き雪なす髯に、世の中から隱れ住んで、市に大隱の餘生を清らかに送つた、其の人の、數寄屋である。

樓の一部屋を造り設けた、二階は酒の池なれば、恁らむ時の、豫て、たしなみがあつたと見える。

舞も唄も然る事ながら、お岸は分けて、逝きし宗

如に、茶道に於ける、秘藏の弟子であつたと聞く。

お岸は思はず、柄杓を落して、恍惚と眺めて居た。が、見る／＼水は溢れ溢れて、飛石は水晶の面を沈め、石燈籠は琅𤦺の影を落して、袖垣に、鴨川の、月の水音通へる時。

「あゝ、龍宮から迎ひに來たえ、貴下、お見やすや。」と莞爾した。

「縛つたぞ、祇園のお岸に緋の手繰でぐる／＼と卷かれた、色男をお目に懸ける。さあ、京洛中、寄つて集つて和八を拝め！」

と引くりかへす段梯子、大亂れに成つた和八の姿が、通魔に緋色の蛇の搦んだ状して、橋がかりを衝と抜けると、續いて四五人、藝妓舞妓が追掛ける。

内證の方で、わつと人聲。

早や戸外を、大和橋の方へ、懸想文賣つた聲のやうに、

「祇園のお岸に縛られた、色男拝まんか、拝まんか。拝まんか。拝まんか。」

と喚いて行く。

呼吸せいてお久類が來て、小縁前へ膝を支いたが、目も、きよとついて、庭の水も氣が付かず……口をきくより、せい／／云ふ。

縁の柱にトンと凭れて、

「何うしやはつた。」

「なんやかてなあ、先刻縛つておくれやしたで、漸つと静まつてな、仰向けに寝て居やはつて、水を呑まう言やはりまつせ。手が出なんだら、何ないにも、こぼれて／／成らんよつて、最うおしづまりやすや云うて、吉鶴はんが手繰解かうしやはるけれど、否や、お岸でなうては解いて貰はん云うては、仰向いたり、俯いたり、くる／／廻らはるうちに、えらう、むさい事しやはつたんどつせ。其なり叉欄干に凭つて、ぐつたりと成らはつたか思ふと、今の騒動や、わやゝがな、貴下はん。跣足で町へ飛出いた。どないにかしておくれやす、頼むよつてな。」

「打棄つてお置きやすえ。」

「然やかて、外聞や。内でもな、お岸はんの名も

出(で)る事(こと)やよつてと、おかみはんが、こないに言(い)うてどすはけえにな。」
「おゝ、辛氣(しんき)。」
と婉(なまめ)かしく、はらりと小褄(こづま)を。

二十九

「お岸はん、遅いえ。」

其と見ると、小美那が橋詰で泣聲を揚げる。京洛中へ拝ませる、と鐘は鳴つて出たが、初夜過ぎでも未だ芝居は刎ねない。さすがに四條へは憚つたらう。和八は大和橋をひた折れに、蹌踉〳〵しながら、此の竹村橋の詰へ出た處を、女たちが追縋つて引留めたのであつた。

袂を取つたは、其の小美那と吉鶴ばかりで、舞妓をはじめ少いのは、柩に掛けた幻の花束見るやうに、後へ退つて、寂しく美しく遠巻きに巻いて、川風に搖れて居る。

「暴れまうてな、見なはれ。」

「壓へ切れん……何ないかしておくれやす。」

蹴上げる足を避けながら、髪も亂れて、二人とも音を絞つた。

「もう、可うおつせ。」

お岸が、すぐに和八の背へ手を掛けると、齊しく

摺退いて二人とも吻と息。

お岸は静かに、片手を懐にしたまゝで、

「貴下、優順にして、ちやつとお歸りやすや。」

と唯云ふさへ、遠く別れる聲がした。

「歸らへん……歸らへん。」と肩を搖る、が、飛上る足は釘づけのやうに成つた。

「お岸はん、早う何ないにかおしやすえ。……途中で聞いた、今の先刻な、此の疏水に身投があつた、……氣味が惡うて、あれ、音をお聞きやす、引込まれさうになつて、恐怖うて成らん。」

と背後見らるゝ状に、おど／＼しながら、小美那は亂れた鬢をぞ搔いたる。

和八を片手に壓へたなり、荒馬の轡頭、丁と取つた姿して、

「誰も立合うて居やはらん、……死骸は上つたのンどすかいな。」

「瀧には見えんよつてにな、……下へ流れた云うて、……見なはれ、あの土手に燈が、それな。」

岸の柳を南下りに、提灯の數が重るのである。

「然やかて、死んだのは此處やによつてに、魂は何處へも行きやへん、可厭いな。」……と思出したやうにー吉鶴が插櫛を落したとて、橋の上を手探りに透して居たが、ー慌しく衝と立つた。

「姉はん、姉はん。」

と向うから皆が呼ぶ。

「可いよつて、此處構はんと、去んでおくれやす、大事おへん。私が連れて歸るはけ……大勢やと尚ほいきらはるのンえ。」

成程、お岸一人の方が、納の可い事を、豫て皆が心得た。……

「まだ醒めやはらんか、最う去なう。……大可へ一度、さあ、お越しやす。」

朧の中に立留つて、橋を見返つた白い顔が二つばかり見えたが、其も消えた。跫音が霞に遠退く。

「去なん、誰が去なう……京洛中へ拝ませる、

やい、放せ。」
と鬼の如く、苦く切なさうに顰めた面にも、微笑を湛へて、
「怒つたんやない、お岸はん、可えか、心配ない。恁う、くゝられた處が嬉しいよつて、洛中へ見せびらかすぢや。うんや、拝ませる。」とばた／＼煽つ。
「辛度やな。」
と、身を曲つたが、其の後手に、和八を結へた緋扱帶の端をぐいと取る。と、他愛なく、ぐにやりとし、ひよろつく足を掬はれて、どさりと尻餅を搗く處を、其のまゝ、欄干の柱に、きり／＼と引結んだ。
「あ、色男、と制札打てや。」
で、酒を吹いて、がツくり投首。
膝も脛も露顯な胡坐を、小褄りゝしく熟と視て、
「あゝ、聞わけのない方や。……つらい思ひで、好いた人に情立てる女子やつたら、あはれや云うて、かばはいでもな、風が吹いても散る花を、無理して手折るものやない！……けどな、私を思うてくれはるを、憎らしとは思はんよつてな、案ずるのどつせ、そないに身を崩いて何うしやはる、醉をさまし

ておくれやす。」

としめやかに云ふ聲が曇つた。

☆30

三十

「天晴なお姿だ。」

來懸つた旅僧は興がる顔して、其處に挫げた、扱帶に捲かれた和八を見ながら、眸を返して、橋に裳の落ちたも忘れて、兩手を白く欄干に、ぢつと、鴨川に差俯向いたお岸を見た。

「一寸……いづれは明早朝、更めて出て話します。……故とらしいが、此の體だから、揚屋へ泊れとあつたが、其は遠慮しました。

確に……之なりでお別れはせんが、しかし、あの兒はお預り申すにしても、まだ、誕生前の嬰兒だ。せめて其の口から、阿女をお母さんと言ふのを聞くまで、何事も心靜かにお待ちなさい。」

肩に置く手を密と搖ると、搖られながら、頭を振つた。

「むゝ、何は兎に角、夜の明けるまで、」

と一人で頷くやうに云つて、

「それは、しかし餘りに見える……お知己の效にお顔だけ包んで行く。」

引提げた、件の　とかいた檜笠を取つて、和八の胸をかけて斜に置くと、潛り込むやうに顔を入れた。

立去兼ねて、旅僧は、すつくと立つ。

音を早めて聞ゆるは、風添ふ疏水の瀧である。

笠から、ひよつこりと顔を出して、

「御坊、卷莨はないかい。お岸はん、一寸喫ましてんか。」

「ばあ、ばあ、ばあ。」
と鼻唄で、垢取りの健沈、素見から立歸る。
きよろ／＼と、三人立の押繪のやうな、橋の朧を〓しながら、擦違はうとて、
「ばあ、ばあ。」

「あ、南京はん。」とお岸が、衝と顔を上げて聲を懸けた。
袖を合はせて、健沈恭しく一揖なし、
「ばあ、ばあ。」

「貴下な、頼まれておくれやす……知ってどしえな。藥湯の私の家方へ行てな。岸が待つとるはけ云うて、乳母にな、嬰兒はんを抱いて來るやうに云うておくれやす。表へ廻つたら世話やよつて、裏口は直き其處や。木戸から庭へお入りやす。えらい濟まんけど、な、可いかえ。

「ばあ、ばあ、」と云ふより早く、心中立てに、ぽか／＼駈出す。

怨めしさうに、
「御坊はん、卑怯なえ。」
「いや、關東ものは卑怯でない、此の場から抱いて歸る。」

待つ間も無かつた、
乳母は背後に附いたらう……唐の手に尚しをらしい、大和撫子のむつきの色、月の向うへ薄紅が、高く捧げられて見えた時、お岸は其時まで、靜と居た。あの、藍色の婦の彳んだ處を動いて、する／＼と瀧ある方へ渡り返すを、兒を迎ふる、と思ひながら、油斷せず、じり／＼と旅僧は引添うた。

「やあ！　了つた。」
疏水の瀧へ、藤の長房、あはれ引留めた手が、辷つて、溺娜な其の姿は宙に、袂の端のみ捉へたのである。水も惜むか、吹返す、冷い風にすらりと留まつた。

東山の月、朧にして、ひとり、清水の空、澄渡り、瀧の面は氣勢に凝つて、怪しき星の映るが見ゆ。

脇明は、はら／＼と、紅を解いて雪を散らす。

「見届けた。骨は玉だ。」

と呻く時、水煙がばつと散つた。水晶の簾の中に、一度すつきりと立姿が浮いて、倒に黒髪を長く沈んだ。

「八大龍王、其の美人、お頼み申す。」

「馬鹿め、嬰兒を落すな。」

とて、健沈の手から引取つて、記念に殘つた、お岸の片袖に、犇と蔽ひ、胸に緊めて、顔を見た。

「南京。」

「ばあ、ばあ・・・・・」

「澤山だ、勘助。」

と苦笑ひして、一聲呼ぶ。

「おゝ、」と云つたが、此奴可恐しく傳法なものいひで、

「親方、何でえ、こりや、何うした幕だ。」

「まあ、其處に居る人の扱帶を解け。」

和八は解かれた、が、ベツたりと腰を抜いて、其處へ坐つたまゝ動かなかつた。

「一束、千圓ある、
と旅僧は懷中から出して和八の膝へ差置いた。
「千茂登の内證で、用箪笥から抜いて來た、お岸の名が出ると惡い、貴下からお返し下さい。
……先刻、英語をお認めに成つたに就いて、私が手で、同じ横文字の手紙を書いて、金子を持參するやう、お店へ當てゝ一通。風の變つたのが却つて證文、南京を使にして持たせて遣る手筈、お笑ひあれ、今は夢だ。
勘助、其風呂敷包に、錐、鋸な、道具が入つた、始末をしろ。それから着換へがある、き樣、最う土地に居るな、辨髪の鬘を棄てゝ、坊主に成つて、直ぐにふけろ。
時に頼みがある、行がけに此の兒を抱いて、今出川……分つたか、此地の大學の教授、あの……博士の處へ行くんだ。
庭を乗越せ。勉強家だから、未だ寝まい。……其の内室も、俺が生きて世にある内は、快う宵から

寝ん。

以前の親友、黒澤龍介、生命を棄てゝ、御夫婦にお願ひ申す。此の嬰兒の御養育偏に頼む。龍介が、かくし兒だ、と、よく言へよ！

さあ、大事に抱け。」

と、わなゝく勘助の手に渡した。

「手下の奴等に言づけを頼む。……可惜、都の橋。あゝ、此の月夜に、ーー櫻でない、血で汚したら洗へと言へ。」

と云ふより疾く袂を探つて、短銃を輕く握つた。

やがて、店、藏を投げた和八の振舞は、京洛中を驚かした。

竹村橋の東袂へ、山形に米俵を積んで、三寶數百百に通貨を裝つた、柳が下の建札。ーー施行。

半纏着、羽織袴など、十四五人を働かせて、御大將、祇園の揚屋の屋根より高く、其の米俵の頂上に

大胡坐。撞木を片手に、緋の扱帯で半鐘を釣つて下げて、幾日も幾日も、カン／／カン／／と囃し立つた。龍介が差置いた、（お岸が夫）の檜笠を横ツちよで。

【完】